
転生

伊佐山詩織

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

転生

【Nコード】

N1790D

【作者名】

伊佐山詩織

【あらすじ】

虐殺ビデオに映し出された美少女は一年前に失踪した真理亜だった。オレと「臭え犬」の二人は謎を解くべくその島に忍び込んだのだが・・・汚辱の現世に生きる意味はあるのか？今「個」であることを問う戦慄のSF。警告！極めて残酷でグロテスクな描写を含みます。

1

もはや男たちの靴はちょうどオレの目の高さにあつて、また穴の上で聞こえるあわただしい声が、そろそろ今の仕事と、そしてオレらの命の終わりの近いのを知らせていた。いつたい、ここでどれほどの時間、この穴を掘りつづけていたのか。時間の感覚は全く消えていた。最初は滝のように流れていた汗もすっかり退き、夏の夜なのに寒いほどだった。ただもうずっと、臭え犬のクソの臭いを嗅ぎながら、掘り終えてしまえばそのままオレらを埋めてしまう墓穴になるはずの、このクソ穴を、臭え犬と二人、掘らされていたのだ。

「こんなはずじゃないよ、ボクはこんなところで死ぬはずがないよ」
臭え犬は相変わらずブツブツと泣き言を繰り返していた。「冗談じゃない、泣きたいのはこつちじゃねえか。テメエの思いつきに乘せられて、連中にとつつかまって、こうやって自分らの墓穴を掘らされてるんじゃないか。連中が殺る前にぶっ殺したるか。そうだ、それがいい。こいつなんか、臭え犬なんか、弾丸一発の価値もありませんや、私がこのシャベルでカタアつけますから、どうか私だけにご勘弁を、つてか。許してはくれねえだろうな。あーあ、呆気ない人生だったナア。この世はやっぱり地獄か。チエ、泣き言を口の中だけで言つてもしょうがねえし、口から出すのは臭え犬みたくもつとみつともねえ。オレは黙って死ぬ。せめて臭え犬よりは立派な最期だったと言つてくれ。今さらなんの意味もねえが。」

「おい、お前」

初めて聞く男の声が、懐中電灯の灯りといっしょに穴の上から降ってきた。

その声に臭え犬はまるでバネが弾けたようにシャベルを放りだし、

そのまま穴の底に土下座した。

「許してくださいヨオ」

「臭えなあ、何の臭いだ、こりゃ」

「さつき言ったクソの臭いっすよ、社長」と、太い声が忌むように言った。「こいつ、ロッカーの中で漏らしやがったんで、ずっとボクラこれを嗅がされ続けですよ」

「ケツ、こいつら死ぬときまでクソまみれか。おい、お前、どんな死に方がいい？ 最後の望みだ、言ってみろ、場合によっては聞いてやるっ」

「許してくださいヨオ」

「営業部長が言うにはよ、経営戦略からも、やっぱり撮っておきたいんだとよ、男の虐殺シリーズもな」

ヒィーと、言葉にならぬ声を上げ、臭え犬は泣き始めた。

「おい、お前、お前はこいつの友だちか？」

懐中電灯の光がオレを射て、社長と呼ばれる甲高い声がオレに話しかけてきた。

オレは手を休め、シャベルを杖に直立して、その声の主を睨みつけた。上からの懐中電灯の光に照らされながらでは相手の顔はよく見えなかったが、ただ、気分だけは、男たちを睨んでいたかった。

「違う」

「じゃあ、なんだ」

言葉に詰まった。

臭え犬は、そうだ、オレにとって、小学校入学以来の、疫病神だ。オレの人生の節目節目で、こいつは常にオレの人生を狂わせ、ブチ壊した。今回もそうだった。

「こいつは……オレの疫病神だ」

「そうか。疫病神か。そうかも知れんぞ。そんならどうだ、疫病神と一緒に穴に入るってのは。どんな気分だ？」

「……」

「ええ？ クソまみれの疫病神と並んで永遠にお寝んねするのはよ」

ケツ、言葉で髑つてよろこんでやがる。変態め。どうせ泣いてもスガっても許しちゃうくれねえんだろ。もういい、勝手にしやがれ。オレはもう口はきかねえ。

「もう知ってるだろうが、ウチの、『美術社』の顧客は変態ばかりでね。ちょうどこの間、若い男のケツを……」

社長は鉄パイプで穴の壁を軽く叩いた。金属の鈍い音が穴に響いた。

「こついうヤツで死ぬまで掘るってビデオの注文があつたんだ。これで生かしたまま串刺しにする、その生本番が欲しいんだと。客からの注文だと、パイプをケツから入れて口から出して、串刺し状態でまだ生きてモガイてるやつから男の口で一本抜けて言うんだがね、どうだ？ オレはダメだと思うんだがな。なにしろ、パイプが心臓にとどきや、その時点で死ぬんじゃないか。ええ？ お前、どう思う？」

オレは初めて恐怖に凍りついた。

今日、いやもう昨日かも知れない午後、臭え犬と一緒にこの島にやってきて病院跡を探ってたらいきなり男たちに囲まれ小突き回されてロツカーに押し込められた。この時はまだ誤解さえ解けばどうになかると思っていたし、ロツカーから出されもう暗くなった裏山に連れ出されて問答無用でこつやって穴を掘らされていても、どこかで許してもらえらうと甘い期待を抱いてもいた。自分の死など本当は実感してはいなかった。と言うより、オレは死ぬのか？自分が死ぬなんて考えたこともなかった。オレはオレなんだぞ、このオレを殺すのか？ しかもこいつらはオレらの死を、いや、断末魔をビデオにとって客に売ろうとしている。もう、ダメだ。本当に終わりで……。

*

やっぱり臭え犬は疫病神だった。おととい、あの事件以来初めて臭え犬から携帯があつて、また昔みたいに散らかりまくった臭え犬小屋で『虐殺V01.4 美術社』とだけシールの貼られた、ネッ

トで手に入れたという秘密の地下ビデオとやらを見せられた。これは、空のプールの底に集められた裸の女十数人を一人づつ解剖台の上に載せて手首足首を拘束、次々に解体・惨殺していくというシロモノで、たちまちのうちに二十五メートルプールの底が血の池と化すその様はあまりにも凄惨、とても現実とは思えなかった。何が起こっているのかわからぬといった様子を見せながら、逃げようともせず、命乞い一つせず、ただ全てを受け入れ、血と断末魔の絶唱の中に解体されていく女たちの姿は実に哀れで、これを、自分の母親が腹を裂いて死んだまさにこの臭え犬小屋で見て欲情する臭え犬の気が知れなかった。

『CGかなにかの合成だろ？ ありえない』とオレは聞いたさ。こんなこと、絶対にありえない。

『いや、これは本物だと思うよ』と臭え犬は言った。『身体とか、この血のリアルさを見てよ。傷口の感じだって、ほら、この皮膚の下の脂肪の色も本物っぽいし、これは本当の虐殺だよ。ボクはこの手の本物も偽物も見てるからわかるんだ。それより、ボクが言いたいのはね、顔を見てよ。この子たち、真理亜ちゃんそっくりだと思わない？』

『……真理亜か……』

画面では鳩尾から臍までを切り裂かれたその女が泡混じりの血を吐いて絶命しつつあった。

『この子はもつと似てるでしょ』

乳房を切り落とされ、絹を裂くような声で叫ぶこの女もたしかに真理亜に似ていないことはなかった。でもどの子も顔が映るのは一瞬で、ビデオを一時停止して見ても確認は難しかった。けれど、見えた範囲では確かに似ていた。いや、よく見れば見るほど、どの子も真理亜と瓜二つと言ってよかった。

『似てるな、確かに』

『でしょう？ きっと、このビデオと真理亜ちゃんの失踪は関係があるよ』

『何を言い出すんだ？』

『思わないの？ これは似すぎてるよ』

オレも、変だと感じ始めていた。確かに変だった。どこがヘンだと言つて、真理亜が映つてることより、それより、オレはこの景色に見覚えがあつた。背景に一瞬映つた古い建物にも確かに見覚えがあつた。

『今のところ、ちょっと戻せ』

オレは臭え犬からリモコンをむしり取り、建物の映つた光景をもう一度眺めた。そして金網の向こうに見える山の形……そうだ、このプールからは海に続く道があつて、入り江にはコンクリートの防波堤、そこには手漕ぎの船が入つていて……

『臭え犬、オレはここに行ったことがある』

『ホントに？』

『ああ、間違いない。昔むかし、親父が一度だけ連れて行つてくれたことがある。ここは無入島のはずだ』

『間違いない？』

『ああ、間違いない』

『真理亜ちゃん……。これはやっぱり運命だよ。ねえ、これからこの島に行こうよ、それで、ここに閉じこめられてる真理亜ちゃんたちを助け出そうよ』

*

バカな臭え犬。助け出す前に自分が捕まつてやがる。

いや、そのバカに乗せられてこうやって穴の中に立たされてるオレはもつとバカか。

オレは心の底から絶望して、そして臭え犬の言ったことを思いだした。

『地獄はね、あの世にあるんじゃないよ。この世が地獄なんだよ』

テメエのおかげで散々地獄を見せられてきたが、こんどこそは本物の地獄らしいじゃないか！ ああ、臭え犬、いったいどう、この落とし前をつけるつもりなんだよ！

オレの心は千切れんばかりに悶えつつ、身体はただ凍りついていた。

社長はオレの返事を待たずに言った。

「……そんな手間のかかるビデオ、何本も撮れんだろう？ で、大切な客の注文だろ、こいつのこんなみつともねえ顔をビデオに撮るわけにもいくまい。お前けっこう男前だしな、変態の好みにも合うだろうぜ」

絶望でアタマの中が真っ白になった。

その白の地に、『臭え犬！』の呪いの赤文字だけが浮かんだ。

「疫病神のよしみで、最期に一本抜く役はこいつにやらしてやるよ。抜くまで疫病神に舐めさせてやる。楽しみにして、せいぜい、ケツに刺されたパイプが口から出てくるまで、頑張って生きるんだな。よし、穴はもういいだろう。撮影用意！」

穴の中から懐中電灯の光が引き抜かれ、向こうに別の照明が入った。そのライトの一つはこちらを直接照らしているらしく、眩しさには目がくらみ、そして閉じた目を徐々に開くと、照明の照らす地面には惨劇の舞台となるのだろう青いビニールシートが敷かれていて、そこには犠牲者の身体を自由を奪うための様々な用具も無造作に転がされていた。

「暴れられても困るからな」と再び穴の上に現れた男が言った。「せめてもの情けだ。麻酔で気絶させてやる。麻酔から醒めた頃にはもう串刺しで口もきけねえだろうから、これが最期だ。さあ、こっちこい」

男は穴の上からオレを手招いた。その手には吹き矢があり、ゆっくりと落ち着いた手つきで、男は注射器のついた矢を装填した。

臭え犬！ オレの疫病神！

最後まで、臭え犬、お前はオレの疫病神だった。

お前さえいなけりゃ、オレはもっとマシな人生を送っていたはずなんだ。少なくともこんなところで自分の墓穴を掘らされたりはしなかつたはずだ。それにこんな、人間が考え得る限りで、最も、

最低で、無惨で、惨めで、情けねえ最期を、しかも変態どもに寄つてたかつてビデオに撮られることなぞ、絶対になかったはずなんだ！
「臭え犬！ テメエ！」

オレは湧いてきた怒りを止めようもなく、シャベルを、臭え犬に向かつて振りかざした。

臭え犬は悲鳴を上げて飛び退いた。

背中に鋭い痛みがあった。

目の前が真っ赤になった。

*

そつだ。もう小学校入学の時からだつた。

入学式の次の日、つまり初めて一人で登校した日、校門に入るその少し前の道で、オレは筆箱を忘れたのに気づいたのさ。オレはあの時も絶望に凍りついたね。小学校初登校の日に忘れ物だぜ、そりゃもう、自殺できればしただろうってくらいの絶望さ。オレは立ち止まって悲しみにしやがみ込んだ。せつかく、夕べ、ママと一緒に用意したランドセルだったのに。オレは小学生になったのが嬉しくて嬉しくて、朝になつても、ランドセルの中身を出しては入れ、入れては出しを繰り返しては出したママが、もういいから学校行けって、オレを追い出すようにして送り出したんだつたけど、そのとき、筆箱は机の引き出しに入れたままだった。

そして通学路、道端でランドセルを開ければ、やっぱりそこに筆箱はなかった。オレはしやがみ込んだまま石になり、ただ涙を堪えていた。

「どうしたの？」

立っていたのさ、そこに、臭え犬が。いや、この時はまだ臭え犬じゃねえ。こいつにはまだ、前の日の入学式の時に同じクラスで紹介された「石川君」ってちゃんとした名があった。まあ、もつとも、石川なんて名を皆が憶えるより先に、数時間後、こいつは勝手に臭え犬になつちまつたから、臭え犬って呼んでたつちつとも構わね

えと言えばそうなんだが。

「筆箱を、忘れたの」

「じゃあね、教室に入ったら、僕の鉛筆と消しゴムを貸してあげる」
ああ、なんて麗しい、無邪気な友情じゃねえか。今思い出しても麗しすぎて涙が出そうになるぜ。実際、この時から、あれが何時限目か忘れたが、臭え犬がクソを漏らして早退するまでの数時間がオレと臭え犬の蜜月だった。

オレらは教室では偶然にも隣り合った席だった。ガキ二人がどんなことを話したのか、もうすっかり忘れてしまったけれど、とにかく友達とはこういうもんだって、オレはそのとき、しみじみと思っただもんだった。二人がそれからどういう腐れ縁を結ぶかも知らないくせに、ガキだったオレらは親友になろうと誓ったものさ。しかもそれをまた、二人だけで勝手に誓ってりゃいいものを、バカなこと、オレらはそこらに吹聴してまわったんだった。

「ボクたち、今日から親友になったの」

みたいにな。ああ、あまりの無邪気！ しかもオレの左隣が臭え犬で、右隣は真理亜だったんだから、人間の運命というのはそういうものさ。

真理亜はあの時、

「ずるーい。私も親友にしてえ」

なんて、例の天国的な笑みで、誘惑するようにオレらを眺めたのだった。

「ダメだよ。親友は一人なんだから。一人と一人だから親友なんだよ」

「どうして?」

「どうしても」

「どうして?」

「どうしても!」

真理亜は泣きそうになり、それで、もし、あとで、女の子を虐めたとかなんとか言われては面倒なんで、オレらはこいつも親友にし

てやったのさ。嬉しそうによ、真理亜は、私たち三人は親友なの、
とかつて、教員にまで吹聴していたものさ。

で、運命の何時限目かがやってきた。

教室に異様な臭いが漂い始めた。いや、異様な、などと言うには
当たらない。皆よく知っている、あのクソの臭いさ。ただ、その強
度が違ったな。教室で嗅ぐあの臭いは、ただもう、ひたすら臭くて
臭くて、ただごとじゃねえ臭さなんだ。

教師は皆に目を閉じて机に伏すように言った。

「怒らないからね、お漏らしした子は手を挙げてね」

失笑が漏れた。そして誰かが立ち上がる音、教室の外に連れて行
かれる気配があった。薄目を開けて眺めれば、隣に臭え犬の姿はな
く、床には黄色い印が点々と続いていた。

おおっぴらに目を開けた愚民どもは、空席と廊下に続く点々を発
見して喚き始めた。そして、その非難の矛先はオレに向いたのさ。

「親友は責任を取れ、責任を取ってこそ親友」

とかなんとか、まあどんなガキの言葉で言われたのか忘れたが、
とにかく、その黄色い点々をオレにどうにかしろって、愚民どもは
喚くわけさ。その時、オレは生まれて初めて後悔というものを知っ
た。筆箱を忘れた後悔、授業中にクソを漏らすような間抜けと親友
になった後悔……。

もう一人の親友、真理亜はどうしてたかっていうと、さっきまで
の親友ごっこなどにも無かったかのごとく、

「あんだ、あいつと親友なんでしょう」とか先頭に立って喚き、あ
げく、教員の机のそばにあったティッシュを手を持ってきて、

「はい！」

ってオレに手渡す始末。

真理亜に渡されたティッシュを握ると、筆箱を忘れたことがこれ
ほどの代償となったことにオレは言いしれぬ理不尽を感じた。けれ
ど、オレ個人のこの理不尽への憤りなど、まわりで騒いでる愚民に
とってはティッシュほどの重さもないのだろう。

オレはティツシユを握りしめて泣いた。

「泣いたってダメよ。泣いても親友は親友なんだから」

そう言う真理亜にはもちろん、情けも容赦もなかった。

オレは泣きながら床に崩れ、四つん這いになり、愚民どもの阿鼻叫喚を浴びながら臭え犬の後始末をドアの近くまでやっていて、そこに教員が帰ってきた。

廊下にまで聞こえる阿鼻叫喚に教員は事態のほとんどを理解していたのだろう。けれどさすがの教員も、オレがティツシユで後始末をしているとまでは思い至らなかったらしい。教員は感動した様子でオレを抱きしめ、オレのやった行為は、他人には絶対出来ない、素晴らしいことだと、親友なるもののスバラシさを絶賛し、そしてオレを囁し立てた愚民どもを責めたのだった。

こうして、このバカ教師のおかげで臭え犬とオレはセットになり、以来ずっと、愚民どもの排撃のマトになった。

ちなみに、臭え犬の名は真理亜がつけた。イシカワだからイヌ、臭いイヌだとよ。子供の造語能力なんてこの程度のものなんだろうが、この日以来、臭え犬が病気で学校に来なくなるまでの四年間、少なくともオレは、こいつが本名で呼ばれるのを聞いたことがない。そして真理亜によればオレは「根本」だからネコ、臭え猫だとよ。じゃあテメエは「佐藤」だからサル、臭え猿かよ、と言いつ返したくもなるが、真理亜は失踪するまでずっと真理亜のままだった。まあ、とにかく、こうして犬と猫の腐れ縁コンビが結成されたってわけさ。
(つづく)

2

目を開ければオレは裸に剥かれ、ビニールシートの上に仰向けに寝かされていた。薄明かりの中、声のする方に光があるらしい気配だった。

身体のどこにも痛みはなかった。どうやらまだ串刺しは免れていらしい。

寝たままで見渡せば、こちらに背中を見せてライトの方を向き地べたに座る男一人以外、そばに人の姿は無かった。連中は皆、ライトに照らされたあちらで何かの用事に忙殺されているらしかった。

オレは手を握りしめた。力はあった。

昔、小学生の頃に指の爪の手術の麻酔が途中で切れて、それこそ地獄の苦痛にのたうったことがあった。そうだ、オレは麻酔の効きにくい体質だったんだ。オレは深呼吸し、脚にも力が入るかどうか確かめた。ふくらはぎには若干ツツたような違和感があったが、もうやるしかないと気を落ち着かせた。

落ち着いてくると男たちの話が聞こえてきた。

「もう死んだ？ やっぱりダメか」

「だろ、オレが言った通り、どうやったって内臓出血で死ぬだろ」
連中、何やってんだ。

静かに寝返りを打つようにしてライトの方を見ると、輪になった男たちの足許には裸の女が三人、奇妙な格好で重なるように寝ていて、そこにちょうどまた一人が手足を持たれてブランコのように振られて投げ出され、ドサ、と転がる場所だった。その女の尻にはパイプが突き立てられていた。

あいつら、試してやがる！

本当に生きたまま串刺しに出来るかどうか、女で試してやがる！
もう四人も！

あいつらは本気だ。狂ってやがるが本気だ！

脳にかかっていた霧はスウツと醒め、自分のやるべきことが順序立てて浮かんできた。

オレはゆっくりと上半身を起こした。起こしてみれば脳の芯にはまだ痺れがあり、身体はまだ自分の身体ではないようだった。息を止め、静かに中腰に起きあがり、背中を見せる男の後ろに歩み寄った。ゆっくりと落ち着いてやればいい。昔プロレスごっこでやった通りに。ただ、裸締めの際動脈じゃない。反則のチョークで気管をツブして一瞬でオトす。大丈夫、大丈夫。そう、オレは自分に言い聞かせた。

男の後ろから両手で首をひっ掴んだ。

喉仏をグイツと押し込んだ。

男の爪が手の甲に食い込んだ。けれど軽く藻掻いただけで男の首はガクリと前に崩れた。

オレは男の身体をゆっくりと地面に寝かせた。

向こうでは次の女が連れてこられるところだった。その女を拘束するのに忙しいらしく、男たちの誰もこちらを見てはいない。

よし、逃げる。

オレの命運は尽きちゃいなかった。

まだ痺れる脚を引きずり、這いながら闇の中に消えていこうとしたそのとき、

「根本君、一人で引っっちゃうの？」

弱々しい声が穴の方から聞こえた。

「臭え犬か？」と、オレは振り返り、静かに言った。

穴の中から臭え犬がこちらを眺めていた。

「ボクを助けてよ、見捨てないでよ」

「仕方ないだろ？ もう時間がない。お前はお前で何とかしろ」

「縛られてるんだ。これをほどいてくれたら、ボクは勝手に逃げるからさ」

「そんな時間はない。オレもまだ脚が痺れてるんだ」

オレはもう見捨てて行こうと決心して、這いながらライトの方を振り返った。そこでは次の串刺しが始まったらしく、絹を裂くような女の叫び声が聞こえてきた。オレは中腰に起きあがった。

「オレはもう行く。あばよ」

「声を出すよ！」

臭え犬の本気らしい声が出た。

「オタク一人を逃がすもんか、ボクを見捨てたら、声を出すよ。連中は本気だし、ここは島だからね、絶対に根本君は見つかると。それでそのまま串刺しだよ。それでもいいの？」

「臭え犬う、テンメエ！」

オレはまた穴を振り返り、臭え犬を睨みつけた。

「もう諦めて、早くボクを助けてよ。時間もないんだし」

オレは仕方なく穴に這い寄り、中を覗いた。臭え犬はガムテープのグルグル巻きにされ、壁に寄りかかって立っていた。

「もとはと言えばテメエのせいだろうが！」

「誰のせいだとか、今さらそんなことは関係ないでしょう。ボクを助けなかったら声を上げるよ。それだけの話なんだから」

オレはライトの方を見た。男たちの影は不気味に蠢き、その動きから、寄ってたかって、女にこの世ならぬ苦しみを与えているだろうことが見て取れた。もはや女の声は声ではなく、くぐもった、野獣の断末魔のような低いうめき声に変わっていた。

「ほどいたら、お前、それで出られるか？」

「うん、なんとかする」

「オレはまだ足がふらふらしてるんだ。穴の外に出たら、手を引いてオレを引き上げてくれよ」

「わかったよ。だから早く」

オレは仕方なく穴の中に降り、臭え犬の膝から、巻かれたガムテープを少しづつほどいてやった。ヤツのズボンと皮膚の間にはヌルリとした感触があり、強烈な臭いが襲ってきた。

そう言えばこいつ、クソ漏らしてやがったんだ。

オレはテープだけを持ち、臭え犬の身体の周りを回りながらほどこいた。麻酔の効きかけた身体には結構な重労働だった。最後に腕をほどいてやると、臭え犬はいきなり穴の壁にとりついた。

アツと言う間もなく穴の外に転げ出た。

そしてそのまま駆け抜けていく無防備な足音がした。

野郎、テメエこそオレを見捨てやがった！ と憤る間もなく、

「逃げた！」という向こうからの声が耳を突き刺した。

オレは穴の縁に手を掛けた。ところが、手も膝も震えて力が入らない。

麻酔は醒めたんじゃなかった。まだ効いていなかったただけだ。運動をしたんで、今頃になって効いてきやがる。

脚も腕も、まるで棒のようだ。

オレは穴の底に崩れた。

ああ、万事休す。

あそこに転がされた女たちのように、パイプを突き立てられて死ぬのか。

力が抜け、オレは意識を失いかけた。

ああ、でも、麻酔が効いてる分だけあの女たちよりはマシだ。

麻酔も何も無しにやられるよりはよっぽどマシだ。

麻酔が効けばもう意識はないんだ、好きにしてくれ。

これで死ぬんだ、死んだあとのことなんか知るか、と、羽布団のような諦念が襲いかかってきた。

「逃げた！ そっちだ！」

逃げた！ その一言で意識が戻ってきた。

「臭え犬！ テメエ！」

オレはあまりの憤りに、最後の力を振り絞って、何の意味もなく、穴の底を打ち叩いた。何度も、何度も。

もう一度気が遠くなる前に穴の底が崩れるような感覚があった。崩れるにまかせた。

全てが真っ暗になった。

*

小学校の一年から四年まで、結局、オレには友達というものはできなかった。間抜けな臭え犬は定期的に授業中にクソを漏らしていたし、そのたびにオレもこいつと一緒にやってはやし立てられていたからな。クソ漏らしの臭え犬、クソ拭きの臭え猫は常にセツトだった。セツトで愚民どもに排撃されていた。排撃、そう、あれは排撃さ。あれは、イジメなんてもんじゃない。徹底的な排撃さ。イジメにはまだその対象に積極的に係わろうという意志がある。排撃にはそんなものはカケラもない。ただもうオレらがそこにいなければいいんで、逆にオレらが愚民どもの視界に入った途端、徹底的な排撃が始まるわけさ。そんなときのガキどもがいかに用意周到で、残虐か、オレらはイヤと言うほど思い知らされた。

たとえば給食当番。オレらは当番であつても配膳することは許されなかった。それはもう絶対的な不文律で、オレらは教員が見ていなければ自分からエプロンをするとはなかったし、もし教員の前で逃れようもなくエプロンを着けなければならぬときは、オレらは配膳はやらす、牛乳を給食室から運んできたりとか、そういう、食物に直接触れない仕事に徹していた。ところがあるとき、教員が何を思ったかオレら二人に配膳を命じた。そして当然なことに、オレらが配膳したおかずは口を付けられることもなく大量に残された。バカな教員はこれでやつと排撃の事実気付いた。で、次の授業で、イジメをやめるようにと説教を垂れた。

教員の説教を聞いて真理亜は声を上げて泣きはじめた。

「どうしたの真理亜ちゃん？」

「わたしが悪いんです」

「どうして？」

「だって、私が二人に渾名をつけたから」

「そうね。あなたも悪いわ。でも、渾名を付けたのはきっかけでしょう？ どうしてイジメが続くのか、みんなも考えてご覧なさい」

「……わたし……」と、真理亜は続けた。「これからは二人に優しくします。友達になります」

「みんなはどうなの？」

友達になる！

友達になります！

まあ、その手の安請け合いの、愚民どもの絶叫！これが教室を満たす様は壮観で、さしもの教員も泣き出す始末。

で、ちようどそのときは本来体育の時間だったんで、愚民どもと一緒にグラウンドに出て遊んださ。鬼ごっことか、その手の遊びをね。でもオレや臭え犬にはわかつていた。こんなのは今だけ、だね。

案の定、次の日から、もっと巧妙にオレらは排撃されたのさ。表面的には何もない、けれど心には壁があった。

結局、四年間、オレと臭え犬は親友でいるほかなかった。

臭え犬のことを心底軽蔑しながら、それでも臭え犬としか友達ではいらなかったのさ。

そして五年生になった新学期、教室に臭え犬の姿はなかった。病気治療、と、それだけしか知らされなかった。

と言うより、臭え犬が消えた理由になんか何の関心もなかった。

これで臭え猫の汚名を返上できる！と、その喜びしかなかった。実際、臭え犬あつての臭え猫だったんで、始業式の日からしばらくしてオレに「根本」という名前が返ってきた。あの真理亜さえ「根本君」と呼んでまともな人間扱いし始めて、それもあつて、一月もしないうちに、オレが臭え猫だった過去は消えてしまった。

地獄の四年間は、すべてあの臭え犬のせいだったのさ。
臭え犬はまさにオレの疫病神だったんだ。

*

後で聞けば、疫病神の張本人、臭え犬は排撃の四年間が天国と思えるくらいに地獄へと落ち込んでいたという。

もちろん詳しい病名なんか知らないし、知る必要もないが、とに

かく臭え犬は治る見込みのない病気にかかって、それはそれは、見ている方が辛くなるような闘病生活を送っていたのだ、という。であまりの辛さにネを上げたのは母親だった。

ある日、退院手続きも何もせず、母親は臭え犬を自宅に連れて帰った。

「もう治療は止めようよ」

自宅に帰って、母親はそう言った。

「先生が言うにはね、治療したって、治る確率は一パーセントも無いんだって。わかる？ 毎日毎日、こんな苦しい思いをしても、九十九パーセントはダメなのよ。それならね、無理な治療なんかやめて、お家に帰って、生きられるだけの時間をね、お母さんと一緒に遊びながら楽しく生きようよ、ね、そうしようよ」

臭え犬には母親の言うことが理解できなかった。

「つまり、何にもしないで死ねってこと？」

母親は泣き崩れた。

「そつだよ、死ねってこつた」

臭え犬が病院に入ったのと入れ替わりに家に入った男が言った。

「ちよつと！」と止める母親を男は一升瓶の底で突き倒した。

「コブは病院にいる、それもあんまり長くねえつつうから来て住んでやったのによ。いったいこりやなんのお芝居だ！ ああ？ お前、長くねえんだろ。ケツ、見りやあ見るほど胸くそ悪くなるぜ、その顔色。ああ？ お前、生きてんのか？」

「ボク、病院に帰る」

「どうして？ もうやめようよ、あんな治療、どうせ効かないのよ？」

「効かなくてもいい。ここにいるよりはいい」

「ガキの方が良くわかつてるじゃねえか」

男はコップに焼酎をゴツプゴツプと注ぎ、一気にあおった。

「ガキも納得してんじゃねえか。早く病院に送って行け」

泣きじゃくる母親の運転する車の中で、臭え犬は、

『ボクは絶対に死なない、死んでも死なない』
そう誓っていた、のだと。

臭え犬は奇跡的に生き延びた。

中三で、ブヨブヨに太った白い顔をしてオレらのクラスに戻ってきた臭え犬は、復学した日、みんなにこの話をした。

みんなは息を呑んだ。

後で知ったんだが、これは、全てホラだった。

病気でもなんでもない。学校が耐えられなくなって、心身症とか何とか屁理屈を付けて家にこもり、夫にも逃げられた馬鹿な母親相手に遊び惚けていた。

で、新しい父親が業を煮やして、臭え犬を学校に送り返したただけの話。

*

オレはと言えば、臭え犬が消えてからの四年間、まさに子供時代ってヤツをエンジョイしまくってた。つまりまあ、フツの子供になっただけだが、そのフツのありがたみってヤツは奪われてみなければわからんもんさ。だから、オレは、帰ってきた臭え犬から距離をおいた。だって万が一、臭え犬・臭え猫コンビ復活なんてことになって排撃が始まったらどうする？ オレは、この疫病神がまたオレを地獄に突き落とすんじゃないかって、それを本気で恐れていたのさ。

そして臭え犬もオレを恐れていたんだろう。オレらは適度な距離ってヤツを保ちつつ、それでもお互いを気にしていた。クラスの愚民どものほとんどはオレらが犬猫コンビだったところのを知っている。中心になってオレらを排撃した数人さえここにはいる。いつ、クラスの雰囲気は劇的に変化してオレらを排撃し始めるか知れたもんじゃない。

だいたい、中三と言えば、十四かそこらの受験を控えたガキどもだ。こいつらには、絶対に、弱い者を寄ってたかって虐めるっていう至上の快樂が必要なんだ。この快樂抜きに、愚民どもが、学校や、

試験や、そういうストレスを自分で解消できるわけがねえ。クラス
の雰囲気は絶対的に生け贄を求めている、そのことは、オレと臭え
犬には皮膚感覚としてわかっていた。愚民どものストレスが危険水
位に達しようとしていたこともな。で、オレらは手を組んだのさ。
そこに何の話し合いもいらぬ。目を見交わすこともない。マア見
事な連係プレーだった。

別に生け贄は誰でもよかったのさ。ただ、誰が見てもこれが生け
贄だと納得するようなヤツじゃ面白くない。面白くないから、そう
いうヤツじゃイジメも長続きしない。例えば上品そうな臭え犬がク
ソを漏らしたとか、成績抜群のオレがそのクソを拭いたとか、そう
いう意外性が生け贄には必要なんで、その意外が妥当へと反転する
過程をみんな眺めるのが、まあ、イジメや排撃の醍醐味だと言え
ば言えるだろう。つまり、愚民どもは、人間がグザグザに崩れてい
く様を見て、逆に自分が人間であることを確認したいのさ。まあな
んともイジメってのは、人間的な、あまりにも人間的な営みなんだ
な。そして多分、臭え犬も同じようなことを考えていて、オレらは
同じ標的に行きついた。

ちよつとシャイなところのある、臭え犬ほどじゃないが太って顔
の白い男だった。理科だけが得意な、少し鈍いくせに気位だけは高
そうなヤツさ。こいつにはどこか臭え犬やオレの臭いがした。愚民
には混じり込めない、ある種、貴族の臭いがね。

で、ある体育の時間、着替えの時に見たんだがアイツのパンツに
クソが付いていた、と、オレが誰かに耳打ちする、のを臭え犬が聞
いてクラスでいちばんの愚物に言う。それだけで充分だった。次の
着替えのとき、そいつは、愚民どもに、パンツ見せると迫られるわ
けさ。キョトンとして、いったい何が？ みたいにアツケラカンと
パンツを脱げばいいものを、ここが、さすが、オレらが標的にした
獲物なんだな。馬鹿なことに、こいつが必死に抵抗するんだ。抵抗
すればするほど自分を追い込んでしまうのにな。身に降りかかった
理不尽を、そのまま理不尽としてアツケラカンと受け入れることの

出来ない貴族の悲劇さ。パンツを見せろってのは理屈じゃないんだ。お前にも、パンツを見せなきゃならない理由なんか、もちろん、何一つ無いんだ。ただ、あるのは、お前がパンツを見せなきゃならないっていう理不尽な義務だけさ。そしてお前はその義務を果たさなかつた。しかも愚民どもの要求に対して、必死で抵抗した。ここでもう、お前の運命は決まったのさ。

この騒ぎを教室の端と端にいて眺めながら、オレと臭え犬は視線で対角線を描いた。

『もう大丈夫だね』

『みたいだな』

ところが大丈夫とはいかなかった。

確かに愚民どもは獲物を得て狂喜乱舞していた。次の日から始まったのは正に人が人を食らうカーニヴァルさ。靴を隠す、カバンを隠す、小ガネをセビリ取る、給食のおかずを混ぜてしまっ、机には「忌中」の札を貼る、「天国に行った誰々君へ」と色紙を作って寄せ書きをする……。毎日がもう、お祭り騒ぎ。男も女も楽しくて楽しくってタマランって感じか。こいつが学校を休んだ日なんか、クラスの雰囲気妙に冷たく死んでしまったね。で、イジメの中心にいた愚物が提案した。あんまりイジメ抜いてこいつが自殺してしまつたら自分たちの生き甲斐が無くなってしまっ、これからは生かさず殺さず、ほどほどに楽しもっつてな。愚民どもには大ウケさ。この提案は拍手で受け入れられた。

ただ、ほどほどで気が済むなら愚民とは言わん。獲物を徹底的にイビリ抜いてこそ愚民ってものさ。そもそも受験を控えた愚民どものストレスは最高レベルにあつたから、「ほどほど」なんかで済むわけがない。

カーニヴァルは最高潮に達し、そして呆気なく終わった。

克明なイジメのノートを残して、こいつは首を吊りやがった。しかも間抜けなことに死にきれず、寝たきりになった。

オレはもちろんイジメには加わらなかつた。むしろ、イジメの行

き過ぎを諫めたり、そいつをイジメからかばったりしてたから、ノートの中ではまるで神様のように描かれていた、らしい。

見舞いに行つた病室で、そいつの母親がオレの手を握りながら泣いたものさ。

息子も馬鹿なら、母親も馬鹿。いや順序が逆か。母親が馬鹿だから、息子がこれほどの馬鹿に育つたんだ。

で、もつと馬鹿なのは臭え犬さ。

持たなくてもいい「罪悪感」ってヤツに苛まれて、夏休み中、こいつのリハビリに付き合いはじめた。もともと入院してたのがオレの親父の病院だったから、母親は「何重にも安心です」とか言つてた上に、オレの親友たる臭え犬のこの献身だろ、感激して、オレの顔を見るたびに泣いてたよ。親父の言うには、きちんとリハビリすれば歩ける程度にはなるってことだったし、実際、最後には歩いたんだから、臭え犬の献身もまあ、無駄じゃあ無かつたってことなんだろう。

いや、逆に全くの無駄だったとも言える。

臭え犬の献身の甲斐あつてか奇跡的な短期間で歩けるようになったこいつは、深夜、屋上から飛び下りて、今回は見事に死んだ。首を吊つて以来、口もきけなかつたから、こいつが何を考えていたのか、なぜもう一度自殺したのか、誰にも理由はわからない。ひとつだけわかっているのは、死への願望に支えられていたからこそ、こいつの、リハビリへの度を超した熱心さが生まれたんだってこと。そしてもうひとつ確かなのは、臭え犬こそが、図らずも、こいつの死への願望をかなえてやったのだということ。

夏休み明け、イジメグループの中心メンバーたちは家裁から戻ってきて、愚民どもの凱旋將軍となった。臭え犬はまたオウチに引込んでしまい、もう二度と学校へは出てこなかつた。臭え犬の学校復帰は一学期で終わった。

オレはと言えば、この胸クソ悪い結末に、それこそ無くてもいいような「良心」を苛まれ、成績も伸び悩んで結局は私立を落ち、東

大に五人通るか通らないかって程度の公立の愚民高校に通うことになっただから、まさに踏んだり蹴ったりだ。

それもこれも、あの臭え犬が学校になんか戻ってきたからで、やはりこいつはオレの疫病神以外の何者でもない。

*

愚民高校への入学前のある日の午後、オレはふと思い立って臭え犬の家を尋ねてみた。もちろん臭え犬のことを心配してのことなんかじゃない。高校の制服姿のオレを見せて、臭え犬に自分の惨めさを思い知らせてやろうとしたのさ。臭え犬は部屋に引っ込んで誰にも会わないって話だったが、オレにはわかっていて。オレだけは別だつてね。

ところが、ヤツの家の呼び鈴を押しても誰も出てこない。と言うより、家の壁は汚れ、庭の草はまるでどこかの湿地帯のようになっでいて、人間自体がいる気配がない。臭え犬が学校復帰していた頃に何度か来た家とはまるで別物だった。

『引っ越したのか』

表札を確認すると元のままなんで、もしかしたら臭え犬小屋にいるかも知れないと庭に入っでいこうとした、そこで、バツタリと、ヤツの母親が買い物袋を下げて帰って来たところに出くわしたのさ。

「靖、くん？」

母親は見事と言っでいいヤツレ方だった。と言っでも、痩せてるんじゃない。肉はついてるんだらうが、その肉がすべて重力に負けている。言っでみれば骸骨に風船をかぶせて水を入れたようならしくなるとるんだ肉付きで、しかもその肉は血が通っているとはとても感じられぬ気色の悪い顔色だった。

「はい。ケンちゃんはどうしてるかと思っで」

「ああ、靖君」と母親は感慨深げにオレを上から下まで眺め回した。

「靖君、高校生になるんだあ」

「はい」

「健一はまだ寝てると思っでの。この時間に起こすと機嫌がものすく

く悪いから……」

「そうですか。じゃあまた来ます」

そう言いながら、もう二度と来る気がないことを察したのだろう。母親は、

「靖君……」

そう言っつてオレを引き留めた。

「はい？」

「また来てくれる？」

「ええ」

「おねがいます……プレハブの方に直接でいいから、本当に、また来てくださいね」

「はい」

そんな気は毛頭なくせに、こんなのをこそ安請け合いと言っただろうが、ところが、この約束は一月後に果たされることになる。

*

高校は思っていた以上にクダラなく、ツマラなかった。

最低だ。

下の下だ。

公立に来るような貧乏人の、愚民の群れ。勉強で成り上がるしかない連中が、毎日毎日、飽きもせずガリガリとガリ勉強くさってる。こんなのに混じって、このオレが授業を受けてるなんて……ああ、息をするのもイヤだ。

何でオレが！ 何でオレが！ 何でオレが！

こいつらと！

全ては臭え犬のせいだ。

臭え犬が学校に戻って来さえしなかったら、オレは順当にエリートとしてエリートにふさわしいエリート高校に進学していたはずなんだ。チクシヨウ、全て臭え犬のせいだ。臭え犬、臭え犬、臭え犬！ オレは臭え犬に取り憑かれ、何も手の着かない状態になってしまった。

あれは五月の深夜だったな。オレは臭え犬の家に向かった。臭え犬を殴ってやらんと気が済まなかった。

「テメエのせいでオレの人生はムチャクチャだ！」

「テメエ臭え犬！ 今夜は顔が変わるくらいブン殴ってやる。」

臭え犬の部屋は庭に建てられたプレハブ小屋で、母屋の玄関とは関係なく路地に続いた庭から自由に入ることが出来た。オレはこの部屋に何度か来たことがあって、その汚さに臭え犬小屋と呼んでいたものさ。

臭え犬小屋には灯りがともっていた。

「いやがる。」

オレはプレハブの戸をいきなり開けた。

臭え犬はビデオと漫画に埋もれたようになって床に座りテレビゲームに興じていたが、オレの姿を見て驚愕して後ずさった。

「臭え犬う！」

「ごめんよお」

臭え犬はただこの場を逃れたいために口先だけで謝りやがった。

オレは足を汚したくなかったんで土足で上がり込み、臭え犬の前で立て膝すると、こいつの胸ぐらを掴んで首を締め上げた。

「何がゴメンなんだ、言ってみろ」

「根本君怒ってるから。ゴメンよお」

「え？ なんでオレが怒ってるかわかるか？」

「ボクが、ボクがいけないから」

「そうだよ、お前が悪いんだよ！」

胸ぐらを掴んだ手を離して、臭え犬のツラを殴った。

漫画の書き文字やテレビの効果音のような音がするかと思ったのに、ただペチリとした何か情弱な感触があっただけだった。臭え犬の肩さえ動かなかった。その情けなさに臭え犬が笑ったような気がして、オレはもう一度殴った。またペチリとしただけだった。

それでも少し気が済んだのと、なんとなく気まづくなってオレは臭え犬に話しかけた。

「何やってんだ、お前」

「ゲーム……」

「それでいいのかよ。結局、お前、中学の卒業式も来なかっただろ」

「……」

「なんで来ねえんだよ」

「ゴメン、根本君、ゴメンよお」

「何がゴメンなんだよ、言ってみろよ」

う、う、う、と臭え犬は呻きながら泣き始めた。

「なんで泣くんのだよ。オレが泣けて言ったか？」

「ゴメン、根本君、ゴメンよお」

「なに謝ってんだよ。オレがいつ謝れって言った」

「ゴメンよお」

「ケツ、胸糞わりい。帰る」

「……根本君……」

「なんだよ」

「ボクが殺したのかなあ」

「誰を？」

オレはわかっていたが、ワザと面倒くさそうに聞いたのさ。

臭え犬はあいつの名を震える口で言った。

「ああ、あいつか。あいつはもちろん、お前が殺したんだろ。リハビリにもっと時間かけてりゃ死ぬ気もなくなってるうちに、お前がわざわざ手伝うから死んだんだ。お前が殺したようなもんさ。いや、お前が殺したんだ」

お前が！

こ！

ろ！

し！

た！

ん！

だ！

そう言いながら一字づつ人差し指で鼻先を小突いてやると、臭え犬はヒィーと声を上げるなり、頭と膝を抱えて丸くなった。

「あいつに申し訳ないと思うんだったら、今すぐ死ね。死んで天国でお詫びしろ」

オレがそう優しく言っただけなのに、何も答えず臭え犬は泣き続けた。

「そうか。死んだって無駄だな。あいつは天国にいても、お前が行くのは地獄だからな。地獄に堕ちろ、な、臭え犬。申し訳ないと思うんだったら、死ねよ。死んで地獄に堕ちろよ」

「根本君」

臭え犬はブヨブヨで涙に濡れた顔を上げた。

「地獄はね、あの世にあるんじゃないよ」

「なんだよ、そりゃ」

「この世が地獄なんだよ」

「知ったような口ききやがって！」

オレはこいつが何か偉そうなことを言うのにムカついて立ち上がり、臭え犬の脇腹を蹴り上げた。ブヨツとした感触しかなかった。

大して効かなかったらしく、臭え犬の顔には何の変化もなかった。

「ケツ、脂肪の塊が、胸糞悪い」

「ごめんよお」

「だいたい、お前、自分がどうしようもねえダメ人間だってこと、わかってんのか？」

「わかってるよお」

「ウソをつけ」

「わかってるよお！」

その反抗的な口調にオレは少しむかついたね。

「ウソをつけ！ 本当にわかってるなら、なんでテメエでなんとかしようと思わねえんだ。ああ？ こんな臭え犬小屋にこもってよ、

馬鹿か、テメエ」

「……」

「本当には、テメエ、わかってねえんだよ、本当にわかってるなら、自分でなんとかするはずだろ！ え？ フツーよお！」

「わかってるよお！ ボクは、ボクは、どうしようもないダメ人間なんだよ」

「だったら、なんで、ダメ人間でなくなるうとしねえんだよ。自分でなんとかしようと思わねえのかよ」

「……………」
「ホラ見ろ、わかってねえんだよ」

「……………」
「お前、本当に病気だったのか？ あんなの、全部、ウソだろ？」

「……………」
「中学のころ、クラスの皆、知ってたよ、お前がホラ吹いてたことくらい。でもな、お前みたいなクズ、イジメたって面白くねえから放って置かれたんだ。無視だよ、無視。虫けらだよ、お前なんか。」

「今お前が死んだって、誰も気にもしやしねえ。葬式にも誰も来ねえよ。クズだ、クズ。え？ 悔しかったら、高校受験して、ちゃんと学校に来てみやがれ」

「ボクだって学校に行きたいよ、行きたいけど」

「なんだよ」

「行きたいけど……………」

「来れないなんて言うなよ」ってオレはピシヤリと言ってやったさ。こいつはズルだ。どこも悪くない癖に、単にズルしてるだけだからな。

「オレらの仕事はな、学校に行くことなんだよ。学校に行ってるからおまんまを食わせてもらえてるんだ。お前は何してんだよ。学校へも行かず、働きもせず、無駄飯食ってるだけじゃねえか。お前の身体の脂肪はよ、全部無駄飯の脂肪なんだよ、無駄飯！ 無駄飯！ 無駄飯なんだよ！ お前なんか生きてるだけで無駄なんだ。社会の無駄！ 人類の無駄！ 地球の無駄！」

オレの蹴りが今頃になって効いてきたのか、臭え犬は床に手をつ

いてベチャベチャと口から戻し始めた。

咳き込む音と腐ったような臭いが臭え犬小屋に満ちた。

「ケツ、ケツからだけじゃ出し足りねえのか、お前」

オレはその夜は臭え犬を放ってそのまま家に帰った。

けれど少しは心配だったから、それから大体週に一回くらい、臭え犬小屋に通ってやることにしたのさ。もう殴ったり蹴ったりはしなかったけれど、ヤツが社会復帰出来るように、毎回、きちんと説教してやった。ボクはダメ人間なんだ、もうダメなんだ、とか言つて、あの巨体が床に丸くなって号泣する様はなかなか壮観で効き目があるみたいだったんで、オレは小屋に来たときは、必ず、こいつが音を上げて胃の中のを全部吐くまで説教してやったものさ。この説教にはダイエット効果もあったんだろう、こいつ、どんどん痩せ始めたね。オレが二年生になる頃にはオレと体重もそう変わらないようになってたんじゃないか。このことでもオレは感謝されてもいいくらいさ。(つづく)

3

いきなりの灯りに眩しくて目が覚め、針で突かれるような痛みが体中に走った。身体はまるで星形の板になったようで身動きさえ出来そうになかった。

目を開けて見える範囲を眺め回すと、蛍光灯があり、コンクリの天井があり、どこかの地下室のベッドに横たえられたような感じだった。

オレは生きてるのか？
串刺しにはされなかったのか？

指を動かそうとすると、そこにまるで電流のような痺れが走った。全身のどこも、とても動かせそうじゃなかった。

「あ」と、女の声があった。「目を覚ました」
「ダメよ」と、もう一人の女の声が制した。「生まれたばかりなんだから」

オレはやっぱり死んだのか。それで生まれ変わったのか。
でも、記憶はどうだ。憶えてる。穴の中で眠り込んだところまで、全部、さっきのことのように憶えてる。

オレはなんとか上体を起こそうとした。けれど腰からつま先にかけて何の感覚もなく、とても起きあがれそうになかった。

「これが男、よね。間違いないわ」
裸の女がオレの股を覗き込んでいた。

「間違いないわ。だって、私たちに付いていないものが、ついてる」
もう一人の裸の女が、オレの、女にはないモノをつまみ上げ、しばらくいじった後、もとに戻した。

二人がひざまづく気配があった。

「ああ、マリアさま」

「玄の玄たるマリアさま」

「道であり」
「自然であり」
「産み出し」
「滅ぼし」
「与え」
「奪う」
「我らの主」
「マリアさま」

女たちは立ち上がり、今度はオレの顔を覗き込んだ。

天井の灯りの陰になった二つの暗い顔を見てオレは驚愕に息を呑み、あまりの恐怖に声を上げた。

「……真理、亜……」

二つの顔は嬉しそうに顔を見合わせ、うなづきあった。

「そう、マリアさまよ」

一つの顔がオレに言った。

「ああ、マリアさま！ 生まれて最初の言葉がマリア！」

もう一つの顔はそう言っつて、オレの頬を優しくなぞった。

そして女たちは納得したようにもう一度うなづきあい、ペタペタとした裸足の足音をさせてオレのそばを離れていった。

……真理亜……

灯りが切られただけではなく、オレはまた深い闇の中に沈んで行った。

*

愚民高校の同じクラスには真理亜がいた。皆が振り返るような美少女に変貌していたが、オレは真理亜の中身を知っていたから別に気には留めていなかった。

なのに、六月のある放課後、校門の所で待ち伏せしてやがった真理亜に告られたのさ。

「根本君、好きな人とか、いる？」

なんて、しおらしく聞いてきやがった。

オレはその頃、親父の病院の看護婦の一人とおかしなことになっていて、なんとかこのブスと切れる口実は無いもんかとそればかりを考えていた。で、目の醒めるような美少女のカノジョが出来たつてのは、切れる理由としては最高だろうと考えたのさ。

「好きな人？ いないよ」

「私のこと、どう思う？」

「イジワル女」

「もうイジワルなんかしないよ。小学生じゃないんだから」

「だから？」

「ねえ、他に好きな子いないんだつたら……」

「お前とつきあえてか？」

「……」

不安に怯えて見上げるような表情がたまらなくソソつたね。ああ、こいつをモノに出来たらつて、オレが思ったのはそれだけだった。

愛情なんかその時はカケラも感じてなかったくせに。

「一緒に帰るか？」

「うん」

うなづく顔にはパアツと明るさが広がって、それを見た時、オレは何とも言えぬ愛おしさを感じたのさ。そして何か照れくさくなつた。

真理亜との共通の通学路はすぐその信号までだったが、オレにとつてはものすごく長い道のりだった。話題があるでもなし。でも、黙つていても心が不思議に通い合うことつてあるもんだと思つた。同級生のカノジョつても、しみじみとしていいモンだと思つたね。

*

そのころセックスだけでつながつていた例の看護婦は、文字通り口から先に生まれてきたような、どうしようもねえ馬鹿女だった。ハマている最中にも突然思い出し笑い、つながつたそのままで糞ツマラねえ話を始めやがる。こっちがそんな話に興味があるかどうかなんてまるでおかまいなし。とにかくしゃべるしゃべる。特に他人

の秘密を触れ回るのが大好きで、オレはこいつを心底軽蔑していたさ。

軽蔑して、軽蔑して、それでもこんな女とこういう関係が続ける自分をもまた軽蔑し、軽蔑して、それで半ば怒りと蔑みとで徹底的に責め立てているというのに、こいつはそれを愛情表現だと勘違いしてやがる。

「うーん。すごかったあ。よかったあ」

とか、すり寄ってこられるたび、何度こいつの腕を振り払おうとしたことか。

ラブホから出る間に目を閉じ唇を尖らせてキスを要求するその間抜け面を何度ブン殴ろうと思ったことか！

それでも続いていたのは、結局、セックスの魅力には勝てなかったからさ。

真理亜とつきあい始めてからも、こいつとの関係は切れなかった。切ることが出来なかった。真理亜とヤルまでは、とりあえず精液のはけ口だけはキープしようと思ったんだな。

で、ある時、この女に聞いたことがある。冗談めかした口調でね。「オレにカノジヨが出来たらどうする？」

「カノジヨって、学校の？」

「ああ」

「無理よ」

「何が？」

「コドモには、私が靖にしてやってるようなことは無理よ。靖は私からは逃れられないわ。絶対に」

「大した自信ですねえ」

「いいわよ、テクを比べたって。小娘には負けないわ」

実際、この頃生産したほとんどの精液をこいつの股に注ぎ続けていたわけで、それを思うと自分で自分が情けなくなる。

*

真理亜とはつきあい始めて一年経ってもキス一つしない清い関係

だった。放課後の教室で二人、とりとめの無いことを話したり、休日に関書館で一緒に勉強したりといった程度の、普通の高校生以下の、コドモの付き合いだった。それでもオレは良かったのさ。中二の秋にお袋が死んで、その感情の隙間に例の馬鹿看護婦に付け入られ、以来ずつと心がトゲトゲしていたのに、それが真理亜の笑顔で文字通り癒されたって思ってたから。

もちろん真理亜との関係は秘密でもなんでもなく、ただの、公然の、清い交際ってやつだった。結局は手も握らなかつたんじゃないか。オレはこの蜜月を、愚民高校でのクダラねえ日常の中のオアシスとして、舐めるように味わっていた。

そして全ての蜜月と同じように、オレの蜜月もある日突然終わった。高二的夏休み明けだった。

クラスに必ず一人はいる、お節介女さ。放課後、廊下に一人でいるとき、こいつに捕まった。

「ねえ、根本君、真理亜の噂、知ってる？」

「何、それ？」

「あの子、援助交際、してるらしいって」

オレはいきなり、ハンマーで、頭を横殴りにブン殴られた。ような気がした。

「休み中、オヤジと歩いてるとこ、何人にも見られてるよ。喫茶店にもいたんだって、オヤジと。ウリまでやったかどうかはわかんないけどって」

「喫茶店にいたくらいで、エンコーかどうかなんてわからねえだろ」

「他の高校で、一緒にやろうって誘われた子がいるのよ、真理亜に」

「冗談だろ」

「何人もいるのよ」

オレは不快になってそいつのそばを離れた。

真理亜と待ち合わせた関書館へと急いだ。

オレの顔色を見て何かを悟ったのかもしれないな、真理亜は、いつにないト口かすような笑顔でオレを迎えた。

結局オレは何も言い出せなかった。

*

臭え犬には、高一の春、真理亜をカノジヨにしたことを真っ先に報告していた。

その羨ましがること！ ざまあみる。

で、例の看護婦の話と混ぜて、オレがまるで真理亜を思うままに貪り、真理亜もオレを存分に貪ってるっていうような、それこそ虚々実々を、具体的に吹き込んでやったのさ。真理亜の写真も見せてやった。一枚くれとせがまれたが、やるわけではない。

「いいなあ。で、真理亜ちゃん良く締まる？」

オレはこの一言に、何か表現できない不快を感じた。真理亜が汚されただけじゃなく、何か、この馬鹿な臭え犬といつの間にか共犯にされてしまったような、奇妙な居心地の悪さを感じたのだった。

こいつ、女を知ってるな……。

直感だった。

だとしたら、いったい誰と？ どの馬鹿な女がこんな半年も風呂にも入らない臭え犬とヤルってたんだ。そういう理性の声がおれの直感を押し殺した。けれど、理性なんかより直感の方がたいていの場合はアテになるもんで、このときも結局はそうだった。

例の馬鹿看護婦の、また例によって他人の秘密の暴露話さ。

高二の夏休み前、ラブホテルで第一ラウンドを終えた枕語りだった。

「靖の中学の同級生で、石川君って、いたよね」

「ああ。馬鹿なヤツだね。今は家に引きこもってるけど」

「お母さん、姫子って言うんじゃない？」

オレは臭え犬の家の表札を思い浮かべた。

「だったなあ。で、それが？」

「私の勘だけど、家の中、結構すごいことになってるんじゃない？」

「と言うと？」

「子供さんって、長いこと不登校でしょう？」

「うん。小学校の五年から中二までね。中三の一学期は出てきたけど」

「あの子、確か、自殺未遂の子のリハビリを手伝ってたよね。今は、どうなの？ 外にとか出てる？」

「さあ、どうだろ」

臭え犬とは最近会ってないから詳しいことはわからない、と、ウソをついた。そのウソを真に受けて安心した馬鹿女はペラペラと調子よく喋り始めた。

「……でね、その不登校の母親ね、ウチの外来で外科に来てたころは、空手か何か習ってるって言ってたのよ。練習中に出来たアザだつて。アバラを折ったのも、空手の事故だつて言ってたの。でもね、空手なんてやってるようには見えないし、おかしいわねって言ったのよ。あれはね、絶対に家の中で殴られてるのよ」

「あいつの父親？」

「私は息子だと思ふのよ」

オレは臭え犬が怯えて丸くなった様を思い浮かべた。

オレは軽く笑いながら、

「あいつは人を殴れるようなヤツじゃないよ。ましてや親をどうしようなんて、そんなこと出来るヤツじゃない」

「わからないわよ。でね……」

馬鹿看護婦は嬉しそうに続けた。

「この間、ウチの産科婦人科に来たらしいのよ」

オレは何かマガマガしいことを予想して、ほんの少しだが身体が震えた。

「保険証見た子が言ってたんだけど、あちこち渡り歩いて、もう七回目の中絶だつて……」

恐怖と穢わらしさに、オレはこいつに背中を向けた。

「七回目だつて！ こんな、普通じゃないでしょう？ 私が想像するにはね……」

愚劣な妄想を喋り尽くして満足したこいつはオレの下腹に手を伸

ばしてきた。

オレはその手を激しく払いのけた。

「乱暴ねえ。口で大きくして欲しいんだったら、ちゃんとそう言うてよ」

馬鹿看護婦は布団に潜り込み、口でその部分を探り当てた。

しかたなくこいつに身を任せながら、オレは、二度と臭え犬小屋へは近づくまいと決心した。

*

夏休み中、オレはその決心を守っていた。けれど休み明けにいきなり真理亜のエンコーの話が聞かされ、その真偽を確かめる手段もなく、本人に問いただす勇氣もなく、オレは自分の感情の持つて行き場をなくして、ただ無性に苛ついていた。そして無性に臭え犬を小突き回したくなった。

久しぶりにあの馬鹿に説教してやるか！

オレはほぼ一月ぶりに臭え犬小屋に行った。

ところが外からうかがうと小屋の中に女の気配があり、声が聞こえる。

「そんなこと！ 私、絶対にやってないわよ！ 言っとくけど、私、処女よ」

あまりに蓮つ葉な調子に最初それが誰だかわからなかった。

「でも、根本君が言ったよ。毎週真理亜ちゃんとセックスしてるって」

「臭え猫があ？」

オレは飛び上がらんばかりに驚いた。真理亜の声だった。

「臭え猫とは手も握ってないわよ。あいつはカモフラージュよ。もしアンタが、臭え猫と同じこととして欲しいんなら、お話もしたし、もう終わりよ。帰るわよ」

「待ってよ、真理亜ちゃん、お金はママから貰ったんでしょ？」

「何よ、その言い方？ まるで私がお金のためにここに来て、それでお金目当てでアンタの相手をしてるみたいじゃない」

「そんなこと、そんなこと言っていないよ。ゴメンよお、真理亜ちゃん」

「私はね、アンタが心配で、だからボランティアでオハナシしに来たんだよ。アンタのお母ちゃんから貰ったのは、これとは全く無関係のお小遣いよ。アンタ、そこんどこ、キッチンとわかってんの？」

「ゴメンよお、真理亜ちゃん」

「じゃあ、帰るわよ」

「真理亜ちゃん……」

「何よ」

「帰っちゃヤダ……」

「アンタ、風呂には入ってんの？」

「さっき、入った」

「じゃあ、パンツ脱いで、ベッドに寝なさいよ。いい？ 今日は大サービスで、ちよつとだけ舐めてあげるから、明日ママにおねだりするのよ、週に一回は真理亜ちゃんを呼んで欲しいって。どんだけ高くても、呼んで欲しいって。でなきゃ、また妊娠さすぞって、キチンと言うのよ。わかった？」

「うん」と、臭え犬がうなづく気配があった。

「電気、消してよ。恥ずかしいから」と、紛れもない真理亜の声が言った。

殴り込もうとして、できず、オレは暗くなった臭え犬小屋を離れ、夜道を泣きながら帰った。

高校入学したてのころに臭え犬が言った言葉を反芻しながら。

『地獄はね、あの世にあるんじゃないよ。この世が地獄なんだよ』

オレは情けなさに、本当に滝のような涙を流しながら、子供のように泣きじゃくりながら、夜道を歩いて帰った。

次の朝、始業時間前、真理亜はいつものようにオレのそばに来て微笑んだ。オレが硬い笑みを返すと、『なぜそんなに表情が硬いの？』とでも言うような、キョトンとした無邪気な表情で、

「数学の試験、大丈夫？」

オレは仕方なく、

「なんとかね」

「大、丈、夫！ こないだ二人で頑張ったからねっ！」

オレの肩を軽く叩くと、何もかもをトロカすような天国的な笑みを浮かべて真理亜は首をちょいと傾げて見せ、すぐに自分の席に戻った。(つづく)

再びの灯りと真理亜たちのさざめくような声に目が覚めた。

そう、真理亜たちだ、懐かしいあの声……。

消えた真理亜。

親と一緒に焼け死んだとか、親の借金のカタにどこかに売り飛ばされたとか、男に貢ぐ生活に入ったとか、実は放火したのは真理亜だったとか、噂の泉は汲んでも尽きぬ、オレの真理亜！

オレの真理亜がどうしてここに、それもたくさんいるのか。いや数は問題じゃない。それよりもどうして真理亜がオレのことを忘れてしまったのか。そのことが大問題だ。

「オレだ、根本だ、いや臭え猫だよ。思い出してくれ！」

叫び出そうにも、身体はまるで言うことを聞かなかった。

「あ、また目が覚めたみたい」

真理亜たちのさざめきが一瞬止み、皆はオレの枕元に集まってきた。

集まった裸の女は一人残らず真理亜だった。

確かにオレは真理亜を探しに来たはずだ。

そして見つかった。

それも、こんなにたくさん。

これを見て、オレはやっと、自分の「死」を受け入れる用意が出来てきた。

「ああ、オレ、やっぱり死ぬんだな。最後に真理亜に会いたかったという望みを、オレの脳がこうやって妄想を見せてかなえてくれてるんだ。ありがとう、ありがとう、オレの脳……。」

「でも、大丈夫なの？」と真理亜の一人が言った。

「何が？」と真理亜の別の一人が聞き返した。

「男は、その女に無い部分を槍にして、女たちを串刺しにした」

んじやないの？」

「『女にない部分』って、これ？」

真理亜の一人はオレのその部分をつまみ上げた。

「これが槍？」

それを聞いて真理亜たちは大笑いした。

「それもそうね。私たちに傷が無いように、今の世では男にも槍がないのかもしれない」

「さあ、そんなことより、男を下さったことをマリアさまに感謝して、みんなで祝詞をあげましょう」

真理亜たちが居ずまいを正す気配があった。

「ああ、マリアさま」

「玄の玄たるマリアさま」

「道であり」

「自然であり」

「産み出し」

「滅ぼし」

「与え」

「奪う」

「我らの主」

「マリアさま」

……

それにしても、妄想にしては長いな。

現実にしてはかなりヘンだし。

『もういいよ、どっちでも』

諦念に目を閉じると、真理亜たちの朗唱だけが脳に直接のように聞こえて来た。

*

転生

臭え犬小屋で真理亜の声を聞いた日からオレの世界は崩れてしまった。なのに、当の真理亜は何一つ変わらず、天国的に無邪気な笑みを見せ、そして、オレはその笑みに呑み込まれて何も言い出せず、

ただ鬱ぎこんでいた。それを見て真理亜は、

「靖くん、いったいどうしたかなあ？ どうしたのお？」などと、うるさいくらいにつきまとってオレをさらに落ち込ませた。

で、一週間経ち、胸騒ぎを抑えきれず、オレは思い切って臭え犬小屋に行った。中学の頃買ったバタフライナイフを久しぶりにポケットに入れて。このころ、オレはこのナイフを常に持ち歩き、気分が塞ぐたびにポケットの中で握りしめていた。

丁寧に軽くノックすると、それに続く浮かれたような返事、そして戸を開けたときの驚愕、すべてが正直で素直な反応だった。けれど「ああ、根本君」と言った臭え犬には何か勝利者の余裕のようなものが漂っていた。『真理亜ちゃんとセックスしてたなんて、全部ウソだったんでしょ、ボクは知ってるよ。それにね、ボクは真理亜ちゃんにしてもらったんだよ』とでも言うような、勝利者の余裕！ オレはそれを感じた瞬間、いきなりこいつをブン殴りたくなった。けれど、それまでの人生でいちばんの自制心を発揮してオレは抑えた。

出来るだけ自然に、「ヨオ」とか言ってそのまま土足で上がり込もうとすると、

「あ、部屋の掃除したから、靴は脱いでよ」

そう言われて眺めれば、小屋は夏休み前とはまるで別の部屋になっていた。

まず明るかった。

真新しい蛍光灯の照らしだす臭え犬小屋は前の何倍も広く感じられ、何も知らなければ潔癖のきれいな好きの高校生の部屋みたいだった。当然、床を埋め尽くしていたアニメのビデオやゲームのグッズの類も無くなってキレイサッパリ、おまけに、カーテンも明るい色の新しいものに替えられていた。

ベッドのシーツも真っ白で皺一つ無く、それがオレの心を苛立たせた。

「そこは？」と、板囲いをした部分を聞くと、

「うん。シャワールーム、付けて貰うんだ」
シャワー！ こいつがシャワー！

と思ってもう一度部屋を眺めれば物置でしかなかった勉強机と椅子がきちんとその姿を現して、なんと本棚には高校の参考書がある。オレがその一冊を手にとると、

「大検、受けようかと思って……」

「大検？ お前がか？」

「うん。高校は多分行けないけど、大学には行きたいから……」

こりゃ大した真理亜効果だ。『笑わせんなよ』とこいつを小突いてやりたくなつたが、とにかく真理亜を捕まえるまではここに通り詰めなくちゃならないんで、オレはまた最大級の自制心を発揮して、「いいんじゃないか？ どうせ馬鹿高校なら行っても行かなくても一緒だからな」

「ありがとう。根本君がそう言ってくれたら……」

などとフツの友達同士のような話をしていると、聞き慣れた足音がした。

それが真理亜だと、足音でオレにはわかっていた。

「誰か来たな」とオレは問いつめる口調で言った。

臭え犬は気の毒なくらい狼狽して、オレの目を避け、戸の方につき飛んで行った。

こいつが何をしようとしていたのかわからないが、全ては無駄だった。鍵をしていない戸はノックも無しに外から開いて、真理亜が入ってきた。そして臭え犬の肩越しにオレの顔を見るなり、いつものトロカすような笑顔で、

「あ、靖くん、来てたんだあ」

オレを振り返り見る臭え犬の狼狽の方が哀れだった。

「真理亜？ なんでお前」

オレはとぼけて言った。

「ゴメンねえ、いつか言おうと思ってただけど、私ね、ボラントエア！ してるの」

「ボランティアあ？」

「石川くんみたいに、部屋に引っ込んで出られないうつて結構いるじゃない。でね、そういう人の話し相手になってあげるつていうボランティアなの」

「何でこんな夜なんだよ」

「だって、私、夜しかあいてないし、それに、引きこもつてる人つて、夜しか起きてないのよ。昼間は誰にも会いたくないって人も多いし」

「臭え犬、お前、ボランティアさんのお世話になんか……」

「ダメよ！」と真理亜はオレを遮った。「靖くん。そんな言い方したら。出て来れない辛さつて、本人にしかわからないのよ。そんな言い方するんだつたら、帰つて！」

真理亜は毒のひとかけらも含まれていない純な眼差しでオレを射た。この瞳の前にオレは何も言えなかつた。一週間前ここで盗み聞きしたとは口が裂けても言えない雰囲気が一瞬で作られてしまつていた。

それから、オレら三人は、実にバカげたことに、夜がかなり更けるまで、まるで幼なじみのように小学校の頃の思い出を語り合つた。そしてもつとバカげたことに、何一ついいことは無かつたと思つていたその頃が、こうやって三人がそれぞれ腹にイチモツ持ちながら笑い合い語り合つている地獄に比べればよほど天国だつたとさえ思えてきた。

オレは、

「また三人で親友になろうか？」

などとなぜか口走り、自分でもそのことに驚いた。

「なろうよ！ なろうなろう」

真理亜は調子よくうなづき、オレと臭え犬の手を取つた。

「私たちは何があつても親友よ。本当の親友よ」

あまりのことに、う、ぐ、ぐ、と突然泣き始めた臭え犬は、

「真理、真理亜ちゃん、また、また来てくれるよね。お話をしたい

んだ。何にも、何にもしなくていい……」

この時、一瞬、真理亜は、地獄の氷河に閉じこめられた魔王のような、見る者全ての心を凍りつかせずにはおかない、まるで死そのもののような表情を見せた。オレはそれを見逃さなかった。

真理亜は臭え犬を遮り、

「来るよ！ だって、私たち親友でしょ。ね、根本くんも！」

オレはその天国的な笑みに負け、仕方なくうなづいた。

*

臭え犬小屋からの帰り道、オレは真理亜にあのお節介女のことを言った。

「馬鹿ねえ。あの人らって、学校以外の付き合いは全部エンコーなのよね、ホント」と静かに一言だけだった。

オレはそれ以上何も言えなかった。

次の朝、教室に入ると、教壇の前に女の子らが集まってなにやら悶着を起こしていた。

オレが入ってきたことに気づいた女の子らはサッと散り、真理亜とあのお節介女だけが残された。

「サア、靖くんに謝って！」

真理亜はお節介女をオレの前に突き出した。

お節介女は涙を拭くことも出来ず、嗚咽を漏らしながら、ただ、黙って、オレに頭を下げた。

始業ベルが鳴り、この件はなんとなくウヤムヤになってしまった。

*

オレはあの夜の、臭え犬小屋の外で盗み聞いた真理亜の声を幻だと思いこもうとした。実際、あれが幻だったらどれほどよかったか！ 幻であってくれ、本当に、幻であってくれ！ そう、あのころのオレがどれほど願ったか。

で、結局、その願いはかなった。オレはあれを幻聴と思いこむことに成功した。

オレはほとんどなんのわだかまりもなく真理亜とつきあい、馬鹿

看護婦とセックスし、たまに臭え犬に説教したりして、こうして何の問題もなく高三になる、はずだった。

ところが、人生でのつまづきつてものはやってくる時は一気に、この時がまさにそうだったな。

全てはあの火曜日の夜、レンタルビデオに行ったのが間違いだったんだ。

あの火曜日はビデオ旧作十本千円の日だった。オレは見逃したドラマを一気に見ようと、それだけが目的だったから、カゴを手にわき目もふらず、「ドラマ」のコーナーまで割と早足で歩いていった。そこで突然、アダルトのコーナーからいきなり飛び出してきた女とぶつかった。

派手な音を立てて、女のカゴの中のビデオが散乱した。

「すみません！」

オレらは同時に言い、しゃがんで、散乱したビデオを拾おうとした。

ところがそのビデオたるや、全部、アダルトの、それもSMの、しかもスカトロの、かなりエグイものばかりだった。

オレは一瞬、それを手にするのもためらわれ、どんな女かと相手の顔を見た。

臭え犬の母親だった。

あつちほもつと驚いたのだろう。

ひいい、と悲鳴を上げるなり、ペタリと尻餅をついてしまった。

茶色のスカート奥にたるんだ太股と白いパンツが見えて、醜悪だった。

オレはなんといいかわからず、そのまま立ち上がった。

「どうせ！ どうせ、どうせ！」

母親はブツブツと喋り始めた。

「どうせうちの子はクズよ！ こんなものばかり見て、本当にクズよ！ 靖君、ね、思うでしょ。クズよね、どうしようもないクズよね。自分で借りに来れないもんだから……私に借りさせて……」

オレは黙ってその様子を眺めていた。

「どうせ、ね？ 私の育て方が悪かったのよ。私が悪いのよ、だから殴られてもどうされても仕方ないのよ。私の生んだ子なんだから私の生んだ子なんだからあ！」

「真理亜は……」

オレはなぜその時、真理亜の名前を出したんだろう。今考えてもサッパリわからない。

ショップの床に尻餅をついたままオレを見上げる母親の形相は、真理亜の名を聞いて、地獄の亡者からいきなり鬼へと変わった。

「しかたないでしょー！」

いきなりの絶叫だった。

「あの子がどんなことをしてるか知ってるわよ！ でも、あの子が来たら機嫌が良くて私を殴らないのよ！ あなたになんかわからないわ！ 毎日毎日、自分の生んだ子にいじめられて、殴られて、どんなにミジメか！ あなたになんかわからないわよお！」

臭え犬の母親は手元のビデオを床に投げつけた。ガシャツと耳障りな音がしてケースが砕け、テープが飛び出てドス黒い渦を床に描いた。

オレは脳から血が引くのを感じながら、冷静に、冷静に、と自分に言い聞かせ、臭え犬の母親を見下ろして言った。

「真理亜は何をしてるんだ？」

母親は、キヤーツと叫びながら頭を抱えた。

後ろから腕を掴まれたのに気づいた。

「なんでもねえよ」

オレは店員を振り切ってショップを出ると、すぐに真理亜に携帯を入れた。

「会いたいんだ、今」

「もう、いつたいどうしたの？」

「なんでもいい。すぐに会いたい」

「しょうがないわね」

携帯を切り、オレは自分に、冷静に、冷静に、としつこく言い聞かせた。

*

待ち合わせのコンビニの前に立つ真理亜の表情は、いつもとはまるで別人だった。

オレを見ても天国的な笑顔は見せず、ただ、

「ややこしい話なんでしょ？」

そう言っつて、指で、ついてこい、と言いつつ歩み始めた。

「真理亜……」

「話は店で聞くから！」

すこんでみせるその低い声は、あの夜、臭え犬小屋の外で聞いた声そのものだった。オレは何も言えず、真理亜の後をまるで万引きが見つかったガキのようにしょぼく歩いて歩いた。真理亜は繁華街のペンシルビルの一階にあるバーの戸を押した。

そしてカウンターの中にいる女性に右手を上げて一言、

「ちょっとね」とだけ言っつて奥へ向かった。

奥のカーテンをくぐると壁にテレビのある部屋で、真ん中に低いテーブルがあり、向かいのソファに座るよう指で言われた。

「お前、なんでこんな店……」

「ママの店よ」

一年以上付き合っつていながら、オレは真理亜の家族のことはほとんど何も知らされていなかった。母親が何か店を開いていると、それだけ。

「で、何？」

真理亜はオレの向かいに座り、リモコンでテレビを付けてそちらを眺めながら、オレの顔を見もしないで言った。

「さつき、臭え犬の母親に会った」

「で？」

「臭え犬の部屋にまだ行っつてんだろ？」

「だから、言っつたじゃない。ボランティアだっつて！」

「ボランティアで舐めるのかよ！」

「何、言ってるの？」

こちらを向いた真理亜から張り付けたような無表情の仮面が崩れ落ち、感情そのものが浮き出てきた。怒りだった。

「聞いたんだよ、前に、お前が臭え犬の所に行ったとき、外で聞いてたんだよ。舐めてやるから母親を脅せとか、そういうこと言ってたろ、お前」

真理亜は怒りの表情を収め、無表情の仮面をかぶり直すと、オレを真正面から見て、まるで火を吐く準備じゃないかと思えるほど深く息を吸った。そしてゆっくりと吐き、立ち上がり、カーテンの向こうへと出ていった。

『ちよつと貰うね』

そんな声がして戻ってきた真理亜は口にタバコをくわえていた。

「タバコ、吸うのか？」

「たまにね」

手慣れた手つきでテーブルの上の大理石のライターを擦り、火をつけた。

「で、何だっけ？」

「だから、聞いたんだよ」

「サイテーね。盗み聞きなんて」

言いながら横を向いて煙を吐いた。

「そんな問題じゃ……」

「好きでやってるとでも思ってるの？」

「じゃあなんで？」

「お坊ちゃま君にはわからないわよね。お金の苦労なんて」

「そんな言い方は……」

「このお店！」と真理亜はオレを遮った。「維持するのに月に百五十万以上いるのよ。その上に若い子の給料も。おまけにここを開くときの借金！で、見たでしょ、この不況だし、お客さんなんていないのよ」

「だからって……」

「父親は朝から飲んだくれよ」と真理亜はまたオレを遮った。「借金返してこの店が軌道に乗るまで、私の稼ぎで食べていくほかないのよ、私たちは」

「なんで臭え犬なんだよ」

「紹介されたからよ」

「誰に？」

「アンタの病院の看護婦に」

いきなりのことに、オレは何も反応できなかった。

「ああいうところの人は、わかるんでしょ、そういう子供がどこの家にいるかってのが。それに保険の種類で金持ちかどうかも」

「まさか、臭え犬だけじゃなくて……」

「そうよ」

オレは息を呑み、真理亜を殴ろうと身構えた、のを押さえつけるように、

「感謝されてるわよ！ 私、みんなに」

「……」

「アンタ知ってるの？ 臭え犬の母親なんか、三回骨折して、七回中絶してるのよ」

「……」

「臭え犬の子よ。笑わせるわ、ああ、話してるだけで気持ち悪い。

とにかく、あそこほど酷くなくても、むちゃくちゃな男の子って多いのよ。で、そこに私が行って話をしてやるだけでもマシになることってあるの。もちろん、絶対、私の身体には触らせないわよ。お望みならアダルトビデオ見せながら、サツサツて流れ作業でやるだけ。それにね、言っとくけど、絶対に舐めたりしないわよ。恥ずかしいから灯り消してって言って、そんなフリしてるだけよ。馬鹿な男の子相手だから、絶対にはれない。払いは親から取ったらいいんだし、エンコーなんかよりよっぽど安全で、確実よ」

「エンコーの話は？」

「ああ、あれね。誰かの親と打ち合わせしてるところを見られたんでしょ。これって、部屋に入らせてもらうまで結構時間かかるから、打ち合わせもよくよくしないといけないのよ。本当は部屋に入るまでが大変なのよ」

「友達を誘ったって……」

「話し相手だけならこれ、悪いバイトでもないでしょう?」

「オレは、真理亜は間違ってると思う」

「私が正しいなんて言っていないわよ。正しくやって親子三人、この店を維持しながら生きていけるんなら、私だってあんなことしないわよ」

「真理亜がしなくても……」

「じゃあお金をちょうだい。月に大体百二十万」

「百二十万!」

「そうよ」

「そんなに稼いでるのか?」

「あの連中と同世代の高校生だからこれだけ稼げるのよ。それとも、どう? アナタのお父さんに言ってお出して貰う?」

「……」

真理亜はタバコを灰皿に押しつけ、肺に残った煙の全てを吐き出すような深い息をした。

「真理……」

「なんでこんな話」と真理亜はオレを遮って言った。「アンタにしたと思う? バツくれて、ウソを突き通すことも出来たのよ。なんで話したと思う?」

オレは何も言えなかった。

「アンタが、靖くんが好きだからでしょう!」

無表情にオレを見ていた真理亜の顔が悲しみに歪み、一気に崩れ、涙が音もなく頬を流れた。そしてその悲しみはオレの悲しみでもあった。オレも耐えきれず、嗚咽を上げ、顔を両手で覆って泣いた。

「靖くんは、私の歯止めなの。希望なの。私の処女は靖くんに捧げ

る。でも、今はだめ。今処女でなくなったら、歯止めがなくなるよ
うな気がするの。私が、あんなことしても、それでも変わらないで
いられるのは、靖くんにつか、きつと、処女を捧げようって思っ
てるからなの。私は汚れたわ。もう本当に。連中の汚い欲望につき
あつてると、全身が精液でまみれたような、汚い汚い気がする。洗
つても洗つても、手から精液の臭いが消えないような、本当に嫌な
感じよ。ああ嫌！ でもね、愛情は靖くんだけなの。靖くんだけな
のよ、だから、靖くんにはわかつて欲しかった。わかつて理解して
欲しかった。だから話したの。こんなこと、愛してる人にしか言え
ないし、でも、愛してる人には絶対言えない。でも、いつか聞かれ
るだろうと思つて覚悟してて、それで、靖くんの愛を試すわけじゃ
ないけど、もう隠し通すことのほうが辛い。ゴメンね。負担かけ
ちゃったね、靖くんにも」

真理亜は立ち上がり、カーテンの向こうに出ると、おしほりを持
つて戻ってきた。

「はい」とオレに渡した

「オレに出来ることは、ないのか」

「私を、しっかり支えて欲しいの。堕ちてしまわないように」
オレらは涙を拭きながら見つめ合った。

いきなり、カーテンの向こうで椅子が幾つも倒されるような音が
した。

『ママ！』と助けを呼ぶような女の声が出て、

『ちよつと、アンタ、何しに来たのよ』と別の女の声。

「チエツ」と真理亜は立ち上がり、カーテンに手を掛けた、瞬間、
倒れ込むように男がカーテンを割って入ってきた。

「なんだ、お前は？」

入ってきた男は脚をふらつかせながら、肩をいからせる滑稽な虚
勢をはつてオレに言った。目は淀んで焦点も合わず、身体全体から
は酒のスエたような悪臭が漂っていた。

オレも立ち上がり、いつ飛びかかれてもいいように身構え、ポ

ケツトの中のバターフライナイフを握りしめた。

真理亜はオレとその男の間に入り、男の方を向いて、

「お父さん、友達よ、友達と学校のお話ししてたのよ」

これが真理亜の親父？

オレは何をどうしていいかわからなくなり、ただナイフを握りしめた。

「真理亜、お前、こいつもしゃぶってやったのか？」

真理亜はいきなりこの男を平手で殴った。

「靖くんになんてこと言うのよ！ アンタなんか、アンタなんか、父親じゃない！ もう出てってよ！」

「真理亜！」

と、さっきこの店に入ってきたときにはいなかった女が、男の後ろから、きつい口調でたしなめた。

「さ、アンタもホラ」と今度は男に。「店に来ないでっついても言ってるでしょう。お客が逃げるでしょう」

「客っ？ 客がどこにいる？ そのガキか？ そりゃ真理亜の客だろ？ ほっ、もうおしぼりも置いてやがる。用意がいいね。こりゃ申し訳なかったね」

真理亜は何も言わず、男を睨みながら身体でオレを庇っていた。

「ちよつと、そのボク？」

男の後ろの女がオレに声をかけた。

「はい」

「ここはさあ、アンタのような坊ちゃんのとこじゃないからね。もう帰って。真理亜も、もう連れてくんじゃないよ」

そう言っつて、男の肩を引きずるようにしてカーテンの部屋から出し、カウンターの椅子に座らせた。男はすぐにカウンターにうつ伏せになった。

「じゃあ、オレ、帰るよ」

オレがそう言った瞬間、

「パパも、ママも、バカーッ！ 私がどんな思いで、どんな思いで

……」

「真理亜……」

オレの声を聞いて真理亜は振り返り、

「アンタは、靖くんはもう帰って。これからはもう地獄なの。地獄だから、これ以上私の汚いところを見せたくないの。早く、早く帰って！」

真理亜の声で男はまた起き出し、カウンターの中心にあったアイスピックを手に取った。

そしてこちらを向き直り、アイスピックを構え、

「おい兄ちゃん、タダで帰ろうとしてるだろ。ヤリ逃げはダメだよ、そんなのは……」

オレはポケットからナイフを出し、反射的に一振りして刃をセツトした。

「ほう、やるのか。面白れえじゃねえか」

男は言い、ジリと半歩こちらに歩み寄り、ゆっくりとアイスピックを横に振り、

「どけ、真理亜」

「だめ、ね、靖くん」と真理亜はオレを庇いながら、「ナイフをしまつて、ね、お父さんはダメなの。酔っぱらっていると、手加減できないから、殺されちゃう」

ただ、凍りついた間合いはナイフを下ろさせなかった。もし一瞬間でもナイフを下ろすそぶりをしたら、そのまま刺されるだろう。

真理亜は男を見据えながら、ナイフを構えたオレの右手にゆっくりと自分の右手を置き、左手を置いた。

ナイフを下ろそうとした瞬間、男はアイスピックを腰に構え、真理亜を突き飛ばして突いてきた。

オレが横に飛び退くと、男はそのままアイスピックを斜めに振り上げた。

間一髪、目の前をアイスピックを持つ手が走った。

真理亜を突き飛ばした分だけ、男の手が届かなかった。でなければ

ば、アイスピックはオレの下顎に突き刺さっていただろう。

「チツ」と男は飛び退くとまた腰を落としてアイスピックを構え直し、両手の間でピンポンした。

オレは角に追いつめられていた。

やられる、と思った。

どちらの手で突いてこられるかわからない。だから避けられない。本気だよ、こいつ。なんでだよ。

脚が痺れる。唇が震える。

コワイよ、怖ろしいよ、なんでこんな事になったんだ。

土下座だ、土下座しよう。

いやその前に、ナイフを捨てるんだ、このナイフを、この手に張り付いて離れないクソナイフを！

その時、「キャーッ」とカウンターのの中から悲鳴が上がり、「真理亜、その手、どうしたのよ？」

オレと男の間にしゃがみ込む真理亜の手から血がボタボタと落ちていた。

「真理亜……」と男が近寄ろうとすると、

「早く！ 靖くん、逃げて！ ここにいたら殺される！」

「真理亜ア！」と男はアイスピックを床に落とし、真理亜の肩を抱こうとした。

「靖くん！ 逃げて！」

オレはナイフを握ったまま逃げるように店を出た。

見れば、ナイフには血がうつすらと付いていた。

あの時、オレが飛び退いたとき、真理亜の手を切ったんだ。

オレはやり場のない憤りを抑えきれず、それにあの男に土下座までしようとした情けなさに、「ウォーッ」と叫んだ。その声に呼応するように、そばにいた女の一群が「キャーッ」と叫び声をあげた。オレは走り出し、走りながら血も拭かずにナイフを閉じてポケットにしまった。

そしてそのまま臭え犬小屋へと向かった。

臭え犬への強烈な殺意を抱いて。

ポケットの、真理亜の血の付いたナイフを握りしめて。

オレがこんなザマになったのは、全部臭え犬のせいだ！

臭え犬、死ね！

切り刻んで殺してやる。

テメエは人間じゃねえ、真理亜を墮落させた悪魔だ！ 犬だ！

目の奥を、夜の街の毒々しい灯りがゆっくりと流れていた。

*

臭え犬小屋の戸を開けると、蛍光灯の光に煌々と照らされて裸の女が立っていた。こちらを見た女は臭え犬の母親で、オレらは互いにギョツとして顔を背け合った。

「ババア動くな！」

臭え犬の声だった。

そのあまりの光景にオレはひとまず今日は引き上げようかと思っただが、この母親も同罪だと気がついた。

二人とも殺してやる。オレはそう覚悟して土足のまま上がり込んだ。

裸の母親の方は出来るだけ見ないようにして、床に座りこむ臭え犬に近づき、

「何やってんだ、お前？」

「ババアに罰を与えてるんだよ」

臭え犬はこれまで聞いたことの無いほど凄味のきいた声で言い、竹刀をバラした竹の鞭で空気を切り、母親の尻を打った。

かなり激しい音がして、もともとへっぴり腰で呻きながら両手で胸を隠してやっと立ってる状態だった母親は、ひいいと情けない声を上げ、よろめいた。

「もうダメなんだろう？ ちょうどよかった、靖くんにも見てもらえよ」

うつ嫌、と言いながら、母親はそこに用意されていた洗面器にまたがると、猛烈な音をたてながらそのままそこにぶちまけ始めた。尻

を向こうに向けたのはせめてもの恥じらいだったのだろう。それでも強烈な臭いが立ちのぼった。

「三十分我慢するとか言ってたくせに、情けないね。罰だよ。お尻をほら、上げて」

臭え犬は立ち上がったって母親の尻を鞭で何度も打ち、そのたびに、洗面器からは、まだまだ尻からポドポドと落ちるものの飛沫が飛んだ。

「空気もだいぶ入れてやったから、音がすごいでしょ」

「臭え犬、お前いつたい、何してんだ？」

オレは馬鹿馬鹿しいとは思いながら、また聞いた。

「このババアが、浣腸のビデオ借りてくるって約束したのに、ウソついたから、替わりにこいつに浣腸したんだよ」

あまりの馬鹿馬鹿しさに、殺意はもう完全に醒め切っていた。

オレはポケットの中のナイフを出し、一振りして刃をセットすると、臭え犬の足もとの床、母親の目の前に投げた。トツというような音がして血の付いたナイフは床に突き立った。母親は一瞬、恐怖に怯えた顔を上げた。

「本当は、今日、そいつでお前らを殺そうと思って来たんだ。二度と真理亜に薄汚い真似ができねえようによ。でもよ、お前らは殺す価値も無えってことがわかったよ。お前ら、もう死ねよ。生きてる価値なんか、ねえよ。でもお前らがもし人間なら、せめて少しは人間らしいところを見せてくれよ。ほら、自分で死ね、すぐに死ね。そいつで死ね」

母親は尻を上げていられなくなったのか、しゃがみ込み、小便を床に漏らしながら号泣を始めた。ナイフの切っ先の血が小便に洗われた。

「いいか、お前ら、二度と真理亜に近づくんじゃねえ。わかったな」

オレはそのまま臭え犬小屋を出た。

『地獄はね、あの世にあるんじゃないよ。この世が地獄なんだよ』

……臭え犬も真理亜も、この世の地獄を見ていたのかも知れない……

そしてオレが臭え犬小屋であいつの母親の糞と小便の臭いを嗅がされてた、ちょうどその頃、あのペンシルビルは一階から丸焼けになって崩れ落ちつつあった。明らかに違法建築の瓦礫の下に十数体の遺体が残され、ほとんどは身元はもちろん性別さえ不明、その中には消えた真理亜と両親も含まれているに違いないと言われた。

臭え犬は口の裏表で合計五十八針と三十六針を縫う傷を額から喉にかけて負いながらもシャワールームに籠もって命からがら母親から逃げ延びた。一方の母親は自ら腹を突いて裂き、臭え犬小屋の床にこぼれた汚物と飛び出したハラワタの中に全裸で藻掻いてるところを臭え犬の新しい父親に発見され、ウチの病院に運ばれたが、手遅れだった。

全てが数時間の間の出来事だった。

*

警察で三人の刑事に入れ替わり立ち替わり、真理亜のこと、臭え犬のこと、あのナイフのこと、その他その他、しつこくしつこくしつこく聞かれ、細かい細かい細かい調書も書かされ、結局二泊して親父に連れられ家に戻ってきた。親父はリビングのソファにドサリと腰を落とし、オレにも座るよう手と言った。親父とはオフクロが死んで以来、滅多に顔をあわさなくなっていて、こうして真正面から顔を付き合わせるのは初めてなんじゃないかとさえ思った。

親父はいきなり、

「この世は腐ってるだろ？」

オレはうなづき、堪えきれず、みつともないと思いつつ泣いた。

「この世は腐ってる」と親父は繰り返した。「もう、どうしようもないとは思わないか？」

「思うよ」と、オレは泣きながら言った。

「なあ靖、俺といっしょに、この世を滅ぼさないか？」

何言ってるんだ、親父？

見れば、親父の視線には一片の冗談も含まれていなかった。

「そのうち、俺の本当の仕事を手伝ってくれ」

親父は立ち上がり、オレの後ろにまわって肩を軽く二回叩いた。そしてそれ以上何も言わず、リビングを出ていった。（第一章

厭離穢土 おわり 第二章 欣求浄土 へつづく）

第二章 欣求浄土 1 真理亜たちの歌

真理亜たちの朗唱をオレは目を閉じて聞いていた。

「ああ、マリアさま」

「玄の玄たるマリアさま」

「道であり」

「自然であり」

「産み出し」

「滅ぼし」

「与え」

「奪う」

「我らの主」

「マリアさま」

*

その昔、まだ天と地が分かれていた頃、この世には女と同じ数の男がいた。

女と男を合わせて人間と言った。

同じ人間だったのに、男は女を狩り、そして飼い慣らし、または打ち叩いて手なずけた。

そして男は、その女に無い部分を槍にして女たちを串刺しにした。串刺しにされた女たちはその傷口から人を産み出した。

女だけでなく、同数の男も産み出した。

男たちは女から産まれたのに、成長すると再び女を狩り、そして飼い慣らし、または打ち叩いて手なずけた。

そして再び男は、その女に無い部分を槍にして女たちを串刺しにした。

串刺しにされた女たちは再びその傷口から人を産み出した。

女だけでなく、再び同数の男も産み出した。

男たちは女から産まれたのに、成長すると三たび女を狩り、そし

て飼ひ慣らし、または打ち叩いて手なずけた。

男たちは群れ、女たちを狩り、飼った。

そして女たちを交換した。

あるいは奪ひ合った。

女を奪ひ合つて、男たち同士で殺し合った。

これが幾千年も続いた。

こうして争いを好む男たちは、平和を好む女よりも強くなった。

強くなりすぎた男たちは、前の世を地獄に変えてしまった。

その昔、まだ天と地が分かれていた頃、この世には女の同じ数の男がいた。

上には空があり、下には昼と夜があった。

昼には陽が地を照らし、夜には月が地を照らした。

争う男たちが空を壊したので、陽と月を支えるものがなくなった。

陽は地へ落ち、地は水に満ちた。

「男たちの、前の世は滅んだ。」

時満ちてマリアさまが降りられた。

マリアさまは自らの身体から、そのまま女を産み出された。

マリアさまは、女のみを、自らの姿に似せて産み出された。

もう男はいらない。

そうマリアさまはおっしゃった。

女たちよ、もう男に狩られることはない。

女たちよ、もう男に飼われることはない。

女たちよ、もう男の工サを作ることはない。

女たちよ、もう男の着物を洗うことはない。

女たちよ、もう男の槍に貫かれることはない。

女たちよ、汝らは、もう人間を産むことはない。

こうしてマリアさまは、女を常世へと導かれた。

昼もなく、夜もなく、苦しみも、悲しみもない。

この常世へ。
女の世、今の世へ。

*

波のように繰り返される真理亜たちの朗唱を聞いていて、自分の生き死にさえわからなくなり、オレはもしかしたら、真理亜たちの言う「前の世」からやってきた人間なんじゃないかと思えてきた。それに、真理亜たちの言うことはもつともだった。男は確かにムチヤクチャだった。男さえいなかったらこの世は確かに平和だったろう。男の世は地獄だった、確かに！ 男の世は確かに滅んでも仕方なかった……。

「見て！」

真理亜の一人が言った。

「泣いてる！ 祝詞を聞いて泣いてる！」

「男なのに！ 男なのに祝詞を聞いて泣いてる！」

真理亜たちの泣き笑いがドツと起き、皆がオレの回りに集まってきた。

「さつきは、生まれて最初にマリアさまの名を呼んだわ」

「きつと今の世なら男も大丈夫よ」

オレは指を動かしてみた。激しい痺れはあつたけどなんとか動かしことは出来た。

痺れに耐えながら上体を起こそうとすると、真理亜たちの阿鼻叫喚が沸き起こり、皆は壁に張り付いた。

オレはゆっくりと皆を見回し、痺れる舌で、

「大丈夫、何もしない」

喋った！ と歓声が上がった。

一人が近づいてきた。

「ねえ、あなた、前の世のこと、憶えてる？」

「前の世？」

「空があつて、天と地が分かっていた頃のこと。女と同じ数の男がいた頃のこと」

「ああ。だいたい」

また歓声が上がった。

真理亜たち皆がオレの次の言葉を待っているのが、その視線と表情からわかった。これほどのあこがれの視線で真理亜から眺められたことは前の世でも無かったような気がした。

「あなたは前の世では……」

「男だった。それで、男に串刺しにされて死んだんだ！」

オレは本当にそうだったような気がしてきた。

「真理亜たちを、君たちを助けよう……」

そう言っただけでまた気付き直した。ここにいる真理亜たちこそ、オレらの探していた真理亜たちじゃないのか？

「それより、ここはどこなんだ？」

「岩戸よ」

「イワト？」

「そう。空が消えた後の、今の世の入り口よ。ここからみんな今の世に入ってくるの」

「今の世……」

「そう、あなたは前の世のことを憶えてるんでしょう？」

「ああ、確かに男はひどかった。ムチャクチャだった」

「あなたも、前の世ではひどいことしたの？」

「よくわからない。それより、ここは？」

「あ、臭え猫！」

いきなり、真理亜の一人が叫んだ。オレはギョツとしてそちらを見た。

叫んだ当の真理亜はまるで硬直してしまっただよように立ちすくみ、視線をどこか宙の一点に定めて、

「臭え猫、臭え猫、臭え猫……」と呟いていた。

「くせえねこ？」と真理亜の一人が言った。

「マリアじゃない？」と真理亜の一人が怪訝そうに言った。

「初めてよ、こんなのは……」

の静かな連呼があるだけだった。

オレは真理亜たちを安心させようと、この「臭え猫……」の真理亜から腕をほどいた。他の真理亜の一人が「臭え猫……」の真理亜の手を取った。

「どうするんだ？」

「黄泉に行くのよ」

「ヨミ？」

「あなたも一緒に行きましょう」

オレはドアを開けてやり、真理亜たちと一緒にその部屋を出た。

外もまた蛍光灯に照らされた廊下だった。見渡すと20メートルほどの直線で、両側にドアが十幾つ並んでいた。天井では蛍光灯の一つが切れかけて点滅を繰り返していた。

「臭え猫……」の真理亜の手を引いた真理亜は「黄泉」とマジックで書かれたドアを開けた。

窓も何もない部屋に六人の真理亜が硬直したように立ち、皆、口々に、

「マリア、マリア……」と呟いていた。

「ここは、何なんだ？」

「黄泉よ」と「臭え猫……」の真理亜の手を引く真理亜は言った。

「ヨミ？」

「そう黄泉」

「ボケてきてマリアさまの名前しか言えなくなったら、みんなここに来てお迎えを待つ。この子も、同じような状態だからつれてきたの」

手を引く真理亜は、そのまま「臭え猫……」の真理亜を「黄泉」の部屋へ導き入れた。

立ちつくし、一つ言葉を呟き続ける七人の真理亜に手を合わせ、残る真理亜たちは廊下で朗唱を始めた。

「ああ、マリアさま」

「玄の玄たるマリアさま」

「道であり」
「自然であり」
「産み出し」
「滅ぼし」
「与え」
「奪う」
「我らの主」
「マリアさま」

……

オレは真理亜たちを放つて「黄泉」の部屋の向かいのドアを開けようとした。鍵がかかっていた。隣のドアも鍵がかかっていた。オレは廊下にある全てのドアを試した。パイプ椅子が乱雑に置かれた「常世」の部屋と、オレがさっきまでいた「岩戸」の部屋、そして「黄泉」の部屋以外は全て鍵がかかっていた。

ここは、いったいどこなんだ？

マジックで書かれた「黄泉」や「岩戸」や「常世」を見せられては、もはや前の世とか今の世とか、そういうふざけた話を信じる気はもはや雲散霧消、すっかり無くなっていった。けれど、それでもここに十数人の紛れもない真理亜がいて、話したり、朗唱したり、ボケて「臭え猫」とか「マリア」とか呟いたりすることは紛れもない事実だ。

オレは少し焦り、鍵のかかったドアを全てノックしながら廊下を行ったり来たりした。

やっぱりあいつらだ。あいつらがここに真理亜たちを飼っているんだ。何か良くわからないけれど特別な洗脳か何かを施して。それであるクソ穴の中で気を失ったオレをここに連れてきた。とすれば、ここはあの島で、この上にはあの病院跡があるのだろう。

オレは「常世」の部屋からパイプ椅子を持ち出し、畳んで、鍵のかかった隣の部屋のドアのノブをブツ叩いた。金属のブチ当たる強烈な音が廊下に響き、続いて真理亜たちの叫び声が起こった。

「やっぱり、やっぱり男は乱暴なの？ あなたも乱暴なコトするの？」

真理亜の一人が泣きながら言った。

改めて眺めれば真理亜たちはみな全裸で、オレももちろん全裸で、急に気恥ずかしさが湧いてきて、

「ゴメン、そんなつもりじゃ……」

さっきの真理亜は、泣きながら本当に悲しそうに、

「ダメよ、そんなことしちゃ、今の世も壊れてしまう」

真理亜たちは本当に悲しそうに静かに泣き始めた。

オレはパイプ椅子を廊下の壁に立てかけ、

「ゴメン、本当にゴメン。君たちの、今唱えてる、その、なんて言うの……」

「祝詞よ」

「祝詞を中断させちゃったね。どうぞ、続けて」

「……あなたも一緒に唱えましょうよ」

マリアの一人が涙をこらえながら言った。

「この祝詞はいつたい、誰が……」

「もう私たちのずっとまえから、女たちはこれを朗唱してきたのよ。ずっと、ずっと」

ほかの真理亜が、

「あなたはまだ前の世のことをハッキリ憶えているでしょう？」

「憶えてるよ。何もかも」

「私たちも、最初はそうなの。あなたが生まれたあの岩戸に生まれるときには、きっと何もかも憶えていたと思うの。でも、どんどん忘れるのよ。きっと、前の世とは反対なんだと思うの。前の世は、生まれたときは何にも知らなくて、どんどん色んな事を憶えてみんな不幸になっていったんだと思うんだけど、今の世は反対で、生まれたときは前の世のこととか憶えてて、色んな事を知って不幸なのに、だんだん不幸なことを忘れていくのよ。で、幸福なことだけを抱いて、最後に私たちを生みだしたマリアさまの名前だけを唱え

るようになって、ボケて、黄泉へ行くの」

「黄泉から先は？」

「お迎えが来て、それで消えるのよ」

突然、学校のチャイムのような、いかにも安っぽい音が響いた。

「戻らなきゃ、常世へ」

「常世？ あの部屋か？」

さつき最初に泣き出した真理亜がオレの手を取り、

「さあ、早く」

*

真理亜たちはそれぞれ常世の椅子に座り、同じように椅子に座るオレを、ある種の期待を持った目で眺めていた。

「ねえ」と一人が口を開いた。

「あなたは前の世では何をしてたの？」

「高校の三年生だった」

「私たちと一緒に……」

そう言った真理亜をもう一人の真理亜が遮った。

「違うように思うんだけど。私たち、たしか、二年生で高校に行く

のをやめたんじゃない……」

「そうだったかしら……」

真理亜たちはいつせいに考え込んだ。

「そっだよ」とオレは言った。「二年生の二学期の最後の火曜日でやめたんだ。学校に来なくなっただ」

「ねえ」と、また一人が言った。「あなたの知ってる私たちのこと、お話ししてよ」

真理亜たち皆がうなづいた。

オレは真理亜について知ってることを、かなり美化して話した。もちろん、オレらが恋人同士であったことも。

*

話の途中でまた一人がボケてしまい、「マリア……」を際限なく呟き始めた。

「黄泉に連れて行かないのか？」

「だって」と皆は、なんでそんなことも知らないのか、とでも言うような、少し蔑みの混じった声で、「今は部屋にいる時間よ。外をお迎えが通ってるから」

「廊下にも出ちゃいけないの？」

「もちろん」と真理亜たちは口を揃えた。

仕方なく、オレはボケた真理亜を無視して話を続けた。正気の真理亜たちは、まるで乾いた土が水を受け取るように、オレの話を、一言も逃すまいとするかのような真剣な面もちで聞いていた。オレは何となく照れくさかった。

話があゝの火事の夜に近づいた頃、再び学校のチャイムのような、安っぽく、いかがわしい鐘の音が響いた。

「さあ、黄泉に連れて行きましょう」

一人の真理亜がボケた真理亜を先導して、他の皆も見送りのように後に続いた。

*

さっきは七人の真理亜がいたはずの「黄泉」は空で、真理亜たちはボケた真理亜をそこに残すと、ゾロゾロと「岩戸」へ向かった。

皆に続いてオレも「岩戸」に入ると、さっきまでオレが寝ていたベッドに真理亜が一人座っていた。惚けたような表情で、でも真理亜の一群の中にオレの姿を見つけると、ギャーツと叫んでベッドの上で身体を丸め、向こうを向いた。

これだ！ と思った。これこそが男女が互いに裸で出会った時の、女の側の順当な反応というものだろう。

「真理亜、真理亜だろ」

オレはそつと声をかけた。

「そつよ。なんで靖くんがここにいるの？」

真理亜は涙声だった。

「助けに来たんだ。真理亜を」

「私を？」

「そつだよ」

背中を向ける真理亜は、膝の上から目だけをこちらにくれた。

「ここは、どこ？」

古い真理亜のうちの一人がオレをそつと押しつけ、新しい真理亜に答えた。

「今の世よ。あなたは前の世から今の世に生まれ変わったの。さあ、私たちの顔を見て。みんな一緒でしょ」

新しい真理亜は古い真理亜たちの姿を見てさらに驚愕の声を上げ、ベッドから降り、ドアへと走り、開けてそのまま廊下へと走り去った。

「最初はみんな、ああよ。まだ不幸だった頃のことを憶えてて、とても不幸なの」

古い真理亜のうちの一人が優しく笑みながら言った。廊下からは助けを呼ぶ声、ノックする音、無理に開けようとしてロックに跳ね返される音がドアの数だけ続き、そして隣の「常世」の部屋で落ち着いたような気配がした。

真理亜たち皆はずっと様子を伺っていて、そして落ち着いたらしいことを確かめると、新しい仲間を歓迎するのに嬉しくてたまらぬといった様子で足取りも軽く「岩戸」の部屋から出ていった。オレも促されて従った。

先頭はもう「常世」で新しい真理亜を前に祝詞を朗唱していた。

新しい真理亜は椅子に膝を抱くようにしてかけ、両耳を手で塞いで丸くなっていた。

「うるさい！」

突然、新しい真理亜は叫び、顔を上げると、古い真理亜たちを見据えた。

「私は私よ。何、私が生まれ変わったって言うの？ 冗談じゃない。こんなところに連れてきて、何をどうしようって言うのよ！」

「あなたはマリアさまに似せて作られたのよ」

「私が真理亜よ！」

古い真理亜たちは悲しそうに首を横に振った。

「私が真理亜よ！」

「いいえ。マリアさまは人を産み出す傷を持っているわ。あなたにはその傷がない。こうして触ってごらんさい」

新しい真理亜は古い真理亜にならって自らを右手で探り、何度も探り、今度は床に降りて股を開き膝をついてまた探り、ついに恐怖に引きつった顔を上げた。

「私は、私はどうなったの？」

「人間を生まなくて良い今の世に生まれ変わったのよ。大丈夫、前の世の記憶は段々と消えていくから。ここで祝詞を唱えていれば、悲しみも、苦しみもなく、最後にはボケて、お迎えが来るわ」

「嫌よ、そんな嫌よ！ 絶対に、嫌！ 臭え猫！ いるんでしょ、靖くん、いるんでしょ！」

オレは呼ばれ、新しい真理亜の前に歩み寄った。

すっかり泣き顔になった新しい真理亜は、

「ねえ、ここはどこ？」

「オレも、知らないんだ」

「アンタには、ちゃんと、あるのね」と、真理亜はオレの股を見て言った。

「真理亜の、何が、無いの？」

「そんなこと！ どうなっちゃったの？ 私、どうなっちゃったの？」

オレは新しい真理亜の隣の椅子に座り、落ち着くのを見守るしかなかった。

その間も祝詞の朗唱は続いていた。

*

「ねえ、臭え猫……」

かなり落ち着いた新しい真理亜は言った。

「私たち、恋人同士だったのかしら」

「だろ？ 真理亜はオレのこと好きじゃなかったの？」

「わからない。好きだったと思いたいの。でも私にはもっと大事なことがあつて……」

「ママのお店のこと？」

「やめて！」と新しい真理亜はオレを遮った。「私が火を付けたのよ！ 私がパパとママを殺したのよ！」

オレは息を呑んで聞き入った。

「それから、それから……」

古い真理亜の一人が朗唱から抜けて新しい真理亜の肩を抱いた。

「いいのよ、辛いことは思い出さなくても。もうすぐに、辛い順に忘れていくから大丈夫よ」

「あの夜、手にひどい傷を……」

新しい真理亜は自分の右手をゆっくりと開いた。

「ない。傷がない」

「今の世では身体の傷も消えるのよ。女が人間を生むための傷と同じように。心の傷と同じように。不幸せは全部消えて、マリアさまだけが残るのよ」

「ねえ、臭え猫……」

「なに？」

「私たち、幸せだった？」

「簡単には言えないよ。幸せな時もあったし、不幸だったこともあった」

「じゃあね、不幸を全部消してしまつたら、幸せだけが残るの？」

「そんなこと……」

「私、今度は本当に幸せになりたい」

「幸せに？」

「うん。今度は本当に幸せに……」

そう言う新しい真理亜の顔は、あの作つたような笑いではない、ごく自然な、幸福への希望に満ちた天国的な笑みに輝いていた。そして目が一瞬虚ろになり、皆につられて祝詞を少しだけ朗唱した。オレは悲しみに耐えきれず、新しい真理亜の手を取った。

「あれ、私、どうしたんだろ？」と、新しい真理亜は我に返って言った。

「祝詞を唱えてた」

「いいのよ」と古い真理亜の一人。「そうやって、忘れ忘れて、幸せだけを抱いてお迎えがくるのを待つよ。疑うこともないし、悲しむこともない。すべてはマリアさまが用意してくれた今の世にまかせればいいのよ」

新しい真理亜はオレの手を静かに払って決然と立ち上がり、朗唱する古い真理亜の一群にスルリと加わった。

オレにはもう、どれが古い真理亜でどれが新しい真理亜か、区別することは出来なかった。

ブツ切れのリズムで歌われる祝詞はオレにとっては耳障りなお経でしかなかったけれど、ここにいる真理亜たちにはまるで麻薬のような効果を持っているのかもしれない。

真理亜たちの朗唱はいつ果てるともなく続いていた。

オレはひとり、言いたい悲しみに襲われて、泣いた。(つづく)

第二章 欣求浄土 2 親父との再会

幸福とは、何だ。

幸せとは。

不幸や地獄のないことなんだろうか。

人の作った祝詞やお経を唱えつつ、何もかも忘れ、自分の名だけを呟くようになるのが幸福なんだろうか。

いや、こうやって幸福について考えていること自体、もう不幸なんだろう。幸福はきつと、何も考えなくていい状態のことなんだろう。祝詞を唱えながらただお迎えを待つ、ここの真理亜たちは本当に幸福なのかも知れない。

そうだ。これこそが、きつと幸福なんだ。

幸福について考えなくていい状態が幸福なんだ。

それは健康なときの体と一緒に、何か問題がある時しかそれがあることを感じることは出来ないだろう。たとえば問題のない胃を人は感じることは出来ない。痛むからこそ、人はそこに胃を感じる。胃がある、と思ったときにはすでに人は胃に問題を抱えているんで、幸福もそれと同じなんだ。幸福について何かを感じ、求め始めたとき、人の不幸が始まったんだ、きつと。いや逆か、人は不幸になつたんで、幸福を求めたんだ。痛む胃の存在を忘れるために胃薬を飲むのと同じように、幸福について考えなくてすむよう人は幸福になるうとしたんだろう。

思えばオレは本当に不幸だった。

臭え犬との出会いも不幸だったし、下らない事件やイジメや排撃を笑い飛ばして愚民たちのなかに溶け込んでいけない性格も、そう、このエリート志向も不幸だった。オレはあるべき自分の姿と今の自分の姿のギャップに耐えきれなかった。オレは臭え犬のせいであるべき自分から不当におとしめられ、そうして故なくおとしめられているが故に、逆にエリートなのだと思いきこんでいた。こうして回り

を見下し、友達も出来ず、ただ一人で偉ぶって生きてきた。臭え犬しか友達がいなかったのも考えてみれば当然だった。オレは自分で自分をおとしめていたんだから。

真理亜を本当に愛していたのかさえわからない。目の醒めるような美少女のカノジョはエリートたるオレにふさわしいアクセサリだと思っていたのじゃなかったらうか。

オレも、ここにいる真理亜たちのように、不幸な記憶を不幸の順に忘れ、最後にいちばんの幸福だけが残ってしまえばどれほど幸福でいられるだろう。

真理亜たちの朗唱を聞きながら、オレは一人泣き続けた。

*

また安っぽいチャイムが鳴り、少しして廊下を「お迎え」とやらが歩む足音が聞こえた。

オレは廊下へと出ようと椅子から立ち上がった。

「ダメ！」

真理亜たちは口々に言った。

「オレは行くよ。オレは君たちとは違う。不幸な人間なんだ」

真理亜たちの声を振り切って廊下に出ると、あの馬鹿看護婦が「黄泉」の戸を開けるところだった。

「あら、起きたの」と軽くこいつは言った。

「なんでアンタが……」

こいつ、病院をやめて実家に帰ったはずだったのに。

「アンタって言うの、やめてよって、何度も言ったでしょう」

「なんで意登子さんが？」

オレは呆気にとられて立ちつくした。

「説明するの面倒くさいから、後にしてよ。それよりアンタも手伝って。ちよつとこの戸を開けてよ。これを連れてくから」

意登子は「マリア……」と呟き続ける真理亜の手を引いて歩み始めた。

「この子をどこに？」

「処理するんじゃない」

「処理？」

「もう！ 面倒だから、全部まとめて、あとでアンタのお父さんに聞きなさいよ」

「親父？ なんで親父が？」

「チエツとこいつは舌打ちして振り返り、

「お父さんこそ最初ビックリしてたわよ。なんでここにアンタがつて」

そう言つて、さつき開けようとしたときには鍵のかかっていた部屋のドアを開け、真理亜を連れて入った。オレも続くと、そこにはまた廊下が長くのびていて、両側には同じようにドアがあった。

出てきたドアの鍵をかけ直し、壁のボタンを押すと、例の安っぽいチャイムが響いた。

「お迎えつて、こいつのことだったのか！」

オレは呆れてなんと言つていいかわからず、新しい廊下を、意登子と、「マリア……」と呟き続ける真理亜と一緒に歩き続けた。

そしてまたドアがあり、廊下があり、とても憶え切れぬ迷路の果てに大きな荷物用のエレベーターがあった。そこに意登子は「マリア……」と呟き続ける真理亜を押し込むと、「箱船」と「病院」のうち、「病院」のボタンを押した。両側から戸は閉まり、真理亜は消えた。

「ふう」と意登子は言った。「今回は一個だから楽だった」

「一個？」

「だって、あれは不良品よ」

「でも、オレ、さつきまであそこで話をした」

「チエツとまた意登子は舌打ちした」

「だから私は、アンタをあそこに隠すの反対したのよ。あそこは確かにいちばん安全だけど。アンタ、あんな不良品と一緒にいて、よく気が狂わなかったわね」

「オレは混乱して何も言えなかった」

「とにかく、まずは服ね。こっち来て」

オレはまた意登子に従った。

幾つものドアと幾つもの廊下があり、最後に、まさに靴下から上着まで、オレの服ばかりを置いているような部屋に行き着いた。

「目が覚めるの、結構早かったわね」

服を着つつあるオレに意登子は背中と言った。

「ここは、どこなんだ」と、オレはやっと聞くことが出来た。

「箱船よ」

「箱船？」

「そうよ。じゃ、来て」

意登子はドアを開け、オレもこいつについて部屋を出た。

*

またドアがあり、廊下があり、その果ての部屋にオレは意登子に連れられて入った。

入って、一瞬、オレは家に帰ったんじゃないかと錯覚した。

ソファも低いテーブルも、壁紙も、ガラス棚もマガジンラックも、全部家にあるのと同じで、窓がない以外、ウチのリビングそのものだった。

おまけにソファには親父が座っていつものように医学雑誌を広げていた。

「おお、靖、目が覚めたか」

まるでいつもの朝のような何事もない口調に、オレは、一瞬、全部が夢なんじゃないかと疑った。

「まあ、そこに座って……」

オレは言われるままにソファに座った。意登子もオレの隣に座った。

「どうだ、大丈夫か？」

「なんか、まだボーツとしてるような」

「ボーツとか。そりゃいい」

「そうだ」と、オレは思い出した。「『美術社』を探してここに来

「たんだ。それで……」

「まあ」と親父はオレを遮った。「いろいろあったから、受け入れるのが大変かも知れないな。でも、全て現実だから。きちんと受け入れて欲しいんだ。本当は順序立てて、少しづつ教えていくはずだったんだがね、まあ、起きてしまったことはしかたない。段々とこの生活になれていくほかないな」

「ここは……?」

「だから、お前らが来た島だよ。その地下になる」

「地下?」

「ずっと前に言っただろう? そのうち、お父さんの本当の仕事を手伝って貰うかもしれないって」

「本当の仕事?」

「滅ぼすんだよ、この世を」

親父の目にはやっぱり一片の冗談も含まれていなかった。

*

前にこの話を聞いても、なぜ親父がこの世を滅ぼそうとしているのか、そこまで世を呪うのか、オレにはさっぱりわからなかった。

もちろん、ちょっととした不満なら理解できる。親の言うとおり、医者になり、博士号も取り、大学にも残れたのに家の病院に戻ってきて、やらされたのは医学とは何の関係もない病院経営。もちろん、この方面で才能があったからこそ、父親から嗣いだ小さな外科病院をこの町いちばんの総合病院にまで大きくすることが出来たんだろう。そしてオレが小学校のころ、親父の父親、つまり祖父が死んで後を追うように祖母が死に、そして親父がただひとつ、父親の言うことを無視して我を貫いて結婚したオフクロが死ぬと、親父は病院経営をその手のプロに任せて若隠居してしまい、年中、外遊やどこかの研究所で過ごして、家でその姿を見ることはほとんどなかった。そう言えば、最近じゃ、親父は、何かコトあるごとに、俺は本当の本当は画家になりたかったんだ、などとボヤキつつ、もう昔みたいに医者になれとは言わず、オレには好きな道を好きなように行け、

なんて説教してたな。

で、いきなりこれだ。

この世を滅ぼすんだと！

*

「冗談だろ？」とオレは言った。

「一気には無理だろうね」と、親父は平然と言った。「最初は物理的にやろうと思ったんだけど、でも無理だとわかった。ここにある程度の弾薬じゃ……」

「弾薬ウ？」

裏返ったオレの声に、意登子が声を上げて笑い、意登子の反応のおかしさに親父も声を上げて笑った。

「確かにオカシイ話だよ」と親父。「核兵器でも使わなきゃ、通常兵器じゃ、一気にこの世を滅ぼすことなんか出来るわけがないよね。こんなこと、気づくのが遅いよね、お笑いだ」

「いや、オレの言ったのはそんな意味じゃなくて、なんで弾薬なんか……」

「ああ、そういうことか」と、親父は平然とした口調で「ここはね、もともと、前にアメリカと戦争したときの、本土決戦のための秘密の地下基地なんだ。俺の親父、靖の祖父ちゃんはこの上の病院で軍医だったんだがね、ここにいた部隊は、本土決戦もせずに終戦つてのがどうしても気に入らなくて、進駐軍相手にもうひと戦争する気で、武器、弾薬、食料も隠したまま、ここに籠もってたんだ。朝鮮戦争が始まったときに、ここにいた軍人は一人残らずみんな半島に渡ったって話だが、まあよくはわからんね。ただ、祖父ちゃんだけが戦場に行かずに、ここの秘密を抱いて戻ってきたんだ」

「そんな古いようには見えない」

「そりゃそうさ。俺が何年も、病院やバブルの時の株の儲けをつぎ込んで改造し続けたからね。この島自体も半分は俺の名義になってる。病院の裏の化成場、生ゴミ処理施設、医療廃棄物処理場も俺の経営なんだ。『美術社』の実質的な持ち主も俺だ。つまりこの島自

体が俺の計画のための基地だと言っている。働いてるのも、みんな、もちろんこの意登子くんも、俺に賛同してくれてる人だけ、この世を憎んでる同志だけさ」

「親父、正気？」

オレは聞かずにはいられなかった。

「正気だよ。こんなこと、狂ってたら出来ないよ」

「本当のことを言っつてよ。本当は何をしてるの？」

「本当か……本当ねえ」と親父は腕を組み、若干遠い目をした。「本当に……本気でこの世を滅ぼそうと思っつてる。こんな腐りきつた世の中、続いてたつて仕方がないからね。で、いちばん効果的に人間を殺すのは何かつて考えたんだ。そしたら、いちばん良いのは、致死性のウイルスや菌を数種類、時期を見てばらまくのがいいんじゃないかつて気がついたわけだ。インフルエンザを何種類かと、天然痘やペスト、コレラなんかを取り混ぜてね。これで十年くらいかけて先進国の人間の五分の四くらい殺したら、資本主義は滅ぶだろうし、まだましな世の中になるだろう。そうは思わないか？」

オレはどんな反応をしていいかわからず、ただ親父の目を見た。

「ただ、病原体は研究施設や病院から手に入れたとしても、それを世界中に輸送してばらまく手段がない。オレにはミサイルなんか作れないし、そんなもの、一発撃てばここの場所がばれてしまう」

「だつたら……」と、オレは少し安心して言つた。

「でも、ミサイルなんか使わない、もつと効果的な輸送手段があつたんだ」

「……」

「人間だよ。感染した人間そのものをばらまけばいいのさ。世界中に、大量に。つまり人間そのものが細菌の培地になつて世界中に散るわけさ。最初の感染源を特定するのなんかほとんど不可能だし、もし万が一、その人間が感染源だつてわかつても、それでも人間だもの、一気に焼き殺すわけにも行くまい。それに、何らかの接触無しにはその人間を隔離するわけにもいかないからね。結構やつかい

だと思うよ。それに、培地には自分が培地だって教ええない。だから人間の中に紛れてしまえば、どれが培地か、誰にもわからない。これは効果的だと思わないか」

「そんな、無理だよ、アヤシイ人間なんかすぐに捕まって……」

「アヤシイ人間だからこそ、世界中どこにでもあるアヤシイ場所にアヤシイ手段で売り払うのさ。目の醒めるような、とびっきりの美少女をね。アヤシイ場所の、アヤシイ店の、目玉商品にしたくなるような、とびっきりの美少女をね……」

オレは気づいてゾツとした。

「まさか、あそこにいた真理亜たちは……」

「そうだよ。『美術社』の連中が前に作った虐殺ビデオは、まあ、言ってみればプロモーションビデオみたいなもんだね。処理と宣伝を兼ねてね。で、アレを見たプロの業者から、殺すくらいならウチに売ってくれてって問い合わせが世界中から殺到したもんだつたよ。

これは、行けるって俺は確信した」

「もう、始めたの……」

「まだまだ。安定した数を供給するにはまだ品質にばらつきがあります。たとえば、お前がさつき見たあれ、あれがまあいちばん量だけは出来てくるタイプなんだけど、見てくれだけなんだ。だつてまずいことに、肝心な箇所が未完成だし。しかも一日で崩れてしまふ。あんなのは使うにしても虐殺ビデオにしか使えないさ。で、靖、お前に手伝って欲しいのは……」

「嫌だよ！」とオレは叫んだ。「親父は狂ってるよ！ そんなの犯罪じゃないか」

「犯罪だよ。それがどうした」

「どうしたって……」

「犯罪で何が悪い。悪いのはこの世だろう？ 靖はこの世の悪をさんざん見てきただろう？ この世は地獄じゃなかったか？」

「だからって！」

「地獄を終わらせるための、最後の地獄だよ。それにこの最後の地

獄はそう長くは続かない。俺たちはこの箱船の中で待つてればいい」
オレは親父の顔をマジマジと見た。
ノックの音がした。

オレらが入ってきたのと反対側のドアだった。親父はそちらに視線をやった。

「とにかく今日はゆっくり休めよ。ちようど食事の用意が出来たつてさ、さあ、来いよ。腹も空いてるはずだろう？」

親父は立ち上がってオレを促した。

「じゃあ、私は行くから。あとは親子水入らずでごゆっくり」と意登子は部屋を出ていった。

*

隣の部屋もまた、ウチの台所そのものだった。
いや、少し違ってた。

オフクロが生きてた頃の台所そのものだった。

去年オレが落として割った醤油差しがそのまま、無くなったと思つていた箸置きもそのまま、汚れたんで捨てたテーブルクロスも真新しいまま、テーブルにしかれてあった。椅子ももちろん、そのままのものが、三つ。

食卓に並べられた料理も、分厚いハンバーグに溶けるチーズが乗り、その脇には揚げたジャガイモ、それにトマトとキュウリと千切りキャベツのサラダ、味噌汁、ご飯。

オフクロの料理そのものだった。

それより、壁の絵、オフクロの肖像……。この油絵は昔病院の廊下の壁に飾られていた。確か、オフクロが死んだあとに外されたはずだ……。

絵の前に歩み寄ると、奇妙な懐かしさと、それよりももっと奇怪な思いに捕らわれて、オレはそこから動けなかった。

「まあ、座って、食えよ。時間の感覚はないだろうが、今、ちようど夕食の時間なんだ」

親父の声を聞きつつ、オフクロの肖像を眺めながら、オレは不覚

にも涙を流した。それはオフクロへの懐かしさからじゃない。オフクロが生きていた頃のリビングや台所をこんな秘密基地みたいな所に復元して、そして肖像を飾り、オフクロの料理を食べている親父への、哀れみに似た、愛おしさとも違う、しみじみとした感情からだった。オフクロを亡くしたことが、もしかしたら、親父のこの狂気の原因なのかも知れない、そう思うと、何か泣けてきたのだった。「懐かしいかい？」

親父は肖像を眺めるオレの後ろから言った。

「うん」

オレは振り返らずに答えた。

親父はオレの脇に歩み出ると、いきなり、肖像のオフクロの額にナイフを突き立てた。

オレは息を呑み、親父の顔を見た。正気そのものの顔だった。

突き立てられたナイフはゆっくりと下ろされ、ズブズブとした音と共にオフクロの顔は両断された。

親父はオフクロの顔を両断した傷に両手を入れると左右に引き裂いた。

「ここに」と親父はこちらを見て軽い笑みを浮かべながら言った。

「ボタンがある」

絵の向こうの壁には、コンクリートの打ちはなしの、三十センチ四方程の四角い窪みがあり、突き当たりには、吊り輪の持ち手のような丸い輪がぶら下がっていた。

「ボタンと言うより、引き手かな。とにかく、あの引き手をグイッと引くと、ここにある弾薬がすべて吹き飛ぶことになってる。島全体が吹き飛んで何も残らないくらいの弾薬の量らしいって聞いているがね。まあ、撤退するとき敵に渡らないように武器を破壊するってのは常識だろうけど、祖父ちゃんらがバカげてるのは、安全な撤退ってことを全く考えてないってことだろうな。こんなところでこれを引いちゃ、本人が逃げる時間がないじゃないか。言ってみれば、これは自爆装置だね。破れかぶれの。どうだ、面白いだろ？」

オレは黙って親父の顔を見た。

親父はオフクロの肖像を額ごと壁から外して無造作に床に放った。
「なんてこと、すんだよ」

オレは堪らず言った。

「オフクロに、なんてこと、すんだよ！」

「オフクロ？ それがか？」

「そうだよ！ 違うのかよ！」

「違うよ」

「じゃあ、なんだよ！」

「俺の妻さ」

そう言っただけで親父は口の中で軽く笑った。

「まあ座れよ」

親父は昔みたいに壁を後ろにして椅子に着いた。オレも仕方なく、怒りを含んだまま、昔のように、親父の向かいに座った。

「さて、何から話そうかな……」

オレも何から聞いていいかわからず、ただ親父の目を見た。親父の落ち着いた視線は、落ち着きすぎていて、やってることの狂気とあまりにギャップがあり、逆に怖しかった。親父はこの静かな顔のどこかに激しい狂気を隠しているのではないかと思った。

「そうだ、そうだ」と親父はさっき絵を引き裂いたナイフをオレの前に置いた。「お前のだろ。返しとくよ」

臭え犬小屋に捨ててきたバタフライナイフだった。

「どうして……」

「なんか、回り回って俺のところに来たんだ。一応、保護者だからね、お前の。まあ、とにかく、食えよ」

気がついてみれば相当の空腹だった。引き裂かれたオフクロの絵を思いながら、オレはやり場のない憤りを込めてハンバーグに箸を突き立てて引き裂き、口に入れた。濃く、甘ったるく、辛目の味付けは昔のままだった。サラダのドレッシングも昔のまま、油ぎって、辛かった。

親父は何も言わず、黙々と、機械的に、料理を口に運んでいた。話も何も無い食事はアツと言う間に終わった。

「マズかったろ？」

オレはうなづくほかなかった。オフクロは料理がド下手だったから。

親父は立ち上がってドアを開け、

「終わったよお、酒をくれ」

「親父、酒なんか飲んでたっけ？」

「ああ、お前の前では絶対に飲まなかったけどね」

ドアが開き、ウイスキーのビンとグラス、魔法瓶を乗せたお盆を持って女が入ってきた。

女の顔を見て、オレはまた息を呑んだ。

臭え犬の母親だった。

「顔見知りだよね」と親父は平然と言った。「治療してる間に促成培養でクローニングして、それに傷を作って、手は尽くしましたが、つてことにして検死に出したんだ。もう娑婆じゃ死んだことになってる、まあ幽霊さ、脚はちゃんとあるがね」

臭え犬の母親は親父が話してる間も表情一つ変えず、テーブルを片付け、ウイスキーの湯割りを作り、空の皿を持って出ていった。

「あの女も無口になってね……息子にあんな大怪我をさせたんだから、しかたないと言えはいえるんだが。まあ、この世を憎むという意味では最高の人材さ。お前も聞いたろう？ あの出来損ないのクローンたちが吠えている祝詞、あれはあの女が作ったんだ。身体も完全でもっと長持ちするクローンが安定生産出来るようになったら、あいつに洗脳を任そうと思ってる」

「親父、本当に本気なのか？」

「本気だよ。この世は滅ぶべきだ。いや、滅ぼすべきだ。これは、滅ぼす手段を与えられた俺の義務なのさ。崇高な、と言ってもいい、義務だ」

親父は湯で割ったウイスキーを一口飲んだ。

「さて、何から話したもんか……」

「なんでだよ」とオレは言った。細かなことはもうどうでも良かった。ただ、なぜ親父がそこまで世の中を憎むのか、それだけが聞き取れなかった。オフクロが死んで、確かにオレと親父とはあまり話もしなくなっていたけれど、それでもそれなりに家族してたじゃないか。何がそんなに不幸なのか、それだけが知りたかった。

「なんでだよ、なんで、そんなにこの世を憎むんだよ」
「知りたいか？」

「ああ」

「お前の母親のせいさ」

「オフクロの？　なんで」

「なんで俺が、こんな部屋を作って、あの女の作ってたのと同じ料理を食べてるか、わかるか？」

「懐かしんでるんだろ？」

「甘いな。甘い甘い。これは、俺にとつての臥薪嘗胆なのさ。この世への憎しみを忘れないようにね」

「オフクロが、憎いのか？」

「それは違う。あいつはいい女だった。ただ、この世が間違ってたんだ」

そう言われても、オレは、初めて親父の目に本気の憎しみを見つけて胸を締め付けられるような悲しみに襲われた。愚鈍だったけど、あれほどやさしかったオフクロなのに……大切な思い出の品を汚物で汚されたような切なさだった。

「俺とお前のオフクロとは、高校の頃の同級生だった。どちらも美術部でね。で、その美術部には、俺たちと仲の良かったもう一人の男がいたんだ。俺たちはいつも三人でつるんだ。そいつが美大に進学したときも、俺は、それにお前のオフクロも、心から祝福したもんだった。俺は、その男とお前のオフクロが結婚するだろうと思ってた。誰が見ても、似合いのカップルだったからな。ところが、お前のオフクロはそいつを捨てて俺を選んだ。なんでだと思っ？」

オレは首を横に振った。

「金だよ。ただ、言っておくが、自分のための金なんかじゃない。そんな女じゃないんだ。いや、むしろ、自分の金のために結婚されたんならまだマシだった……。お前のオフク口は、結婚して二年目位だったな、お前が生まれた頃、あの男の絵を買ってやるうって俺に言った。あいつはフランスに渡って、売れない絵描きになって、食うや食わずの生活に堕ちてたからな。で、俺が買うって言ったら、あの男はきつと、哀れみはいらん、とか言っただけで嫌がるだろうから、自分がうまく画廊を通して買ってあげるからって、そう言うんだ。俺も大賛成したよ。あいつの絵の才能は俺も買ってたし、実はなんとか援助したいって、思ってもいたところだったからな。まあ病院も上手く行って余裕もあったし、あちこちに一人の作家の絵をかざって統一的な雰囲気を出すのも悪くないだろ。病院を拡張するたび、何年もかけて半端じゃない枚数を画廊を通じて買ったものさ。その一枚が、ほら、その、あきらかにお前のオフク口をモデルにした絵だ」

親父は床に転がる絵を目で指した。

「なんで気づかなかったのか。今も俺は自分自身の馬鹿さ加減に呆れるよ。お前のオフク口が愛していたのは俺じゃない。あの男だったのさ……。本気で愛していたからこそ、相手を所有するんじゃない。ただ助けてやるうとしたんだ。俺の金でね」

そんなことはない、と言おうとして言えなかった。胸が押さえつけられるようにつかえ、何も言えなかった。オレは呼吸さえあやうくなくなっていった。

「はつきりしたのは、お前のオフク口が病気になって入院してからさ。あの男は一度だけ見舞いに来て、俺も入れた三人で、ただ昔話の馬鹿話をしたんだ。そして病室から出るとき、一瞬、あいつらは黙って目を見交わした。それだけで、俺には全てがわかった。最期のお別れにも、こいつらには言葉なんかいらなかったってことが……。それからすぐにお前のオフク口は死んだ」

親父はまたウイスキーの湯割りに口をつけた。

「あのころのウチの病院にはあいつの絵が溢れてたから、それで気づいて、あいつももう二度と来なかったよ。それなりに売れる絵描きのつもりでいたんだろう、その舞台裏を見せられて屈辱と恥辱の地獄にのたうつてたんだな。で、俺はお前を疑ったよ。あいつの子じゃないかってね」

酔ってきた親父の口調と充血した目にゾツとして、オレは身震いした。

「いや、疑ったというのはウソだな。確信を持って、お前はあいつの子だと断じたのさ。で、お前を徹底的な馬鹿に育て上げて、どうしようもない人間にして、そのことであいつらに復讐しようと思っただのさ。それで意登子をあてがった。どうだ、意登子は馬鹿だったろう？ あんなのでも、お前と一回やるたびに三万も要求してくるんだ。ええ？ 半端な額じゃないだろ」

「親父い！」

オレはたまらず立ち上がり、この男を殴ってやろうと身構えた。

けれど、眉一つ動かさぬ冷静さに気圧され、結局何も出来なかった。「ほう、オレを親父だと認めてくれるわけか。まあ、結果から言えば、そうさ。血液検査では間違いなくお前はオレの息子だ。それに、あの男とお前のオフクロとの間には、心以外、何の関係もなかったみたいだからな」

オレは悔しさと、意登子のような、あんな女をあてがわれていい気になっていた自分への怒りに、テーブルに拳をブチ下ろした。何度も、何度も。

「まあ」と親父は平然とした口調で言った。「お前にあの意登子の馬鹿が感染しなくて、結果としてはよかったよ。さすが俺の息子さ、馬鹿じゃない」

「真理亜は？ 本物の真理亜もここにいるんだらう？」

オレは真理亜だけが救いのような気がして、その名を呼んだ。

「いるよ」

親父はまた平然と言った。

「意登子が病院に連れてきたんだよ。ほら、あの火事の夜さ。こっそり、手の傷を治療してやってってくれてね。あのころは意登子にはこのことは知らせてなかった。馬鹿な女だからね、秘密が守れるわけもないし。ただ、これで、意登子が真理亜くんに患者の情報を流してるのがわかってね、ほら、引きこもってる男の子の……」

「あいつが真理亜に！」

「そうだよ。こんなこと思いつくのは意登子以外におらんだろう。でね、これは病院としてはまずいから、すぐに辞めて貰って、患者の情報を漏らしたことは不問にするからって条件で、真理亜くん専属の看護婦としてこっちに來てもらったんだ。だいたい、ああいう馬鹿は手元に置いとかないと危なくてしょうがない」

「真理亜に会わせる」

オレは出来るだけ口調を落ち着けて言った。

「もちろんだよ、靖はそのためにここまで來たんだろう？ その勇氣にはきちんと敬意を表すよ。まあ、座れ」

オレは言われるままに腰掛けた。疲れがドツと來て、なんかもう、どうでもよくなってきた。

「で、どうだい？」

「何が？」

「お前もこの世を滅ぼしたくなったんじゃないか？」

「いや、あんたを、殺したくなっただけ」

「それは筋違いってもんさ。それは、俺がお前のオフクロやあの男を憎むのと一緒にだよ。何の解決にもならない。あの男も、お前のオフクロも、本当に誠実な人間だった。誠実な人間が、誠実に生きてそれでこれさ。これはもう、世の中自体が間違ってるからだろう？」

「だから滅ぼすのか？」

「まあ、いつてみれば、それはきっかけの一つに過ぎないね。言っとくが、あの男と俺とは今でも親友だよ。上で会っただろう？」

『美術社』の社長、あれ以来人格は破綻してしまっただけ、まあ俺の

同志だよ」

穴を掘らされ、殺されかけた恐怖が甦ってきて、オレは何も言えなかった。

「ただ、言えるのは、あいつや俺を含めて、世の中に絶望できるってのは、これは崇高な才能なんだよ。お前も気づきかけてるんだろう？ お前自身、特別な人間なんだって。自分は人とは違うって。お前も、貴族的な何かを感じ始めてるんじゃないか？ 人が平気で生きていけるこの世を、お前は、ただ生きるだけで息苦しく感じてないか？」

オレはうなづくことも出来ず、ただ視線を親父に返すのが精一杯だった。

「そういう人間はね、この世か、自分か、どちらかを滅ぼさなきゃ生きていけないんだ。それでね、この世を滅ぼすのにも二種類あるんで、一つは、目をつぶること。まあ、隠遁だね。主観的にこの世を滅ぼしてしまうとき。目をつぶればこの世は見えなくなる。こうして、見えないものは無いものだとして、生きていくこと。これはまあ、自分を滅ぼすことと紙一重で、実に簡単さ。でももう一つ、この世自体を滅ぼそうってのは、難しい。どれだけ難しいかっていうと、なんだかんと言っても、この世は太古から続いているものね。だから、この世自体を滅ぼすってのは無理だとあきらめて、この世のつながりに断絶を持ち込むんだよ。それは人によつては革命だったりするんだけどね。ただ、革命とは違うのは、俺は政治をしようとは思わないってところかな。ただ見てみたいんだよ、この世に断絶が起こるところをね。この世の裂け目を見てみたい」

「やっぱり、親父……」

「なんだい？」

「アンタは狂ってる」

「かもね。だからお前に、あの自爆ボタンのことを教えたんじゃないか。あのボタンのことは俺以外、誰も知らない。お前と俺だけの秘密だ。もし、お前が、自分の命を懸けてでも俺のすることを止め

たくなつたら、遠慮は要らないよ、あのボタンを使えばいい……」

親父は大きく背伸びしながら欠伸した。

「じゃあ、俺はもう寝るよ」

そう言って立ち上がり、ドアの向こうに、

「靖を部屋に送ってくれ」

すぐに臭え犬の母親がやって来た。(つづく)

第二章 欣求浄土 3 再びの真理亜

ベッドの置かれた部屋の壁にはオレが島に来たときの服とカバンとが掛けられ、机の上にオレの腕時計、床に置かれたカゴにはタオルとガウンが二人分、まるでホテルのようにきれいに畳まれていた。臭え犬の母親はクローゼットを指しながら、

「下着や着替えは下の棚にあります」

「ねえ、あんたは……」

「明日朝7時に食事を持って来ます」

臭え犬の母親はオレを遮ると、それだけ言って出ていった。

ドアが閉まると同時に鍵のかかる音がした。

一瞬間な気がしたけれど、ドアが開くかどうかを確認する気は起きなかつた。だって、もしドアが開いたとして、それで廊下に出たとしても、この迷路の中じゃ、それは単に、もっと広い部屋に閉じこめられたってことに過ぎない。

もう、どうでもいいのさ。何がなにやらわからないし。

オレは親父が渡してくれたナイフをポケットから取り出して見た。同じ種類の別物だった。だってこの刃にはオレがつけたイニシャルの傷がない。

「ニセモノだ」

オレは一人でそう言ってベッドに腰掛け、整理しきれない情報、制御しきれない感情の錯綜に頭を抱えた。それでも身体は正常に動きはじめたらしく、ここに来て最初の便意があつた。

トイレはシャワーと一緒になっていて、まさにちやちなビジネスホテルと言ったところだった。

用をたしてそのまま裸になり、シャワーを浴びた。髪も、身体も洗った。

ガウンを羽織って部屋に戻ると、ベッドには人が腰掛けていた。

真理亜！

でも、この真理亜は本物か？ 確かにあの夜の、淡い青のＴシャツ、緑のミニでちょこんと腰掛けているんだけど……
「靖くん、会いたかった」

真理亜は悲しみと喜びとのまだらになった表情で見上げた。

オレは堪らず抱きしめたくなくなったが、それをグツとこらえた。

「お前、本物？」

真理亜は右手を差し出した。手のひらを横断する傷が白く走っていた。

「あの夜の？」

「うん」

「痛かった？」

「あの時はあまり感じなかった……」

オレはベッドの真理亜と向かい合うように、椅子に座った。

「あの夜、オレがお母さんの店で……」

「やめて、お願いだから……」

真理亜は俯いて首を静かに振った。サラサラの髪が肩を掃いた。

猛烈な愛おしさに耐えきれず、オレは真理亜を抱きしめた。拒まない柔らかさに、オレはベッドに真理亜を押し倒した。

「暗くして……恥ずかしいから」

真理亜は横顔を見せながら言った。耳にはつれる産毛が金色に輝いていた。

*

抱き合ううち、裸の真理亜の身体には見る見るうちに新しい腕と脚とが生えてきて、数えれば全部で五十四本にもなった。そして真理亜はそのままゲジゲジのように部屋の中を這いまわり、壁を這いのぼり、天井の角の隅に落ち着くと、上からオレを見下ろしてニタツと笑うのだった。オレはその様を眺めながら、気持ち悪いともなんとも思わず、両手を広げ、真理亜がオレに飛びついてくるのを受け止めようと身構えた。すると真理亜はもう天井にはおらず、オレの後ろから五十四本の腕と脚を絡めてきた。しかも目の前には数え

切れぬほどの真理亜がいて、しかもその真理亜たちはたくさんの手足のどこかでつながる、まるで網のような身体ごとオレの上に被さってきた。

重くはなかった。気持ち悪くもなかった。そしてもちろん嬉しくもなかった。

オレが欲しいのはたった一人の本物の真理亜なんだ。

本物一人で充分なんだ。

でも網のように手足のつながった真理亜^{たち}は縮んだり伸びたりしながらオレの上をはいずり回り、まるであの馬鹿看護婦のようにオレの顔の上に馬乗りになって唇や舌での愛撫を強要するのだった。

して……して……して……

オレはだんだんと面倒になってきた。けれど次々とズルズルとベルトコンベアーのように運ばれてくる真理亜の身体は切れ目無く唇に被せられ、もっともつとと、うごめき、ざわめき、オレに休むことを許さない。

真理亜、これがお前の本当の姿なのか？

そうよ、しっかりと目を開けて見て。

そしてオレは目を開けた。もちろん夢の中で。今まで目を閉じて見ていたものを、今度は目を開けてみたわけだ。ところが目を開けたその世界の方がほの暗く、夢の中のように霧がかかっていた。全ては輪郭だけで、目をよほど凝らさなければそれが何かわからないほどだった。

ダメだ、目を開けてちゃ、何も見えない。

そう？ だったら目を閉じて、しっかりと見て！

そして見えたもののおまじきさにオレは声を上げそうになかった。

真理亜の顔は全てオレだった。しかも身体は、どす黒く変色してグザグザに崩れかけていた。オレの全身に恐怖と激痛が走った。

あまりのおまじきさにオレは再び目を開けた。

すると親父のナイフの一振りですべてのオレの顔はまっぶたつに

縦断され、身体の全ても粘土細工のように、けれど生々しい内蔵をぶちまけながら崩れ落ちた。

親父はナイフをかかげ、こちらを見て、ニタツと笑った。オレはもう一度ゾツとした。

ノックの音に目が覚めた。

自分の耳にも聞こえるくらい、心臓が速く激しく打っていた。

*

二人分の朝食を置くと臭え犬の母親は無言で出ていった。

真理亜はオレと同じベッドの中から、臭え犬の母親を無視するでもなく、気を使うでもなく、ごく普通の口調で、

「どうもありがとう」と言って送り出した。

パンとスープとベーコンエッグとサラダとオレンジジュース、テーブルに並べられたこの陳腐さが逆にオレには奇怪だった。

真理亜はけだるそうに起き上がるとガウンをまとい直し、

「私、トイレに行くの」

「うん」

「耳を塞いでてね、お願いよ」

オレは両手で耳を塞ぐ真似をした。

「そのままよ、絶対に」

馬鹿馬鹿しいとは思いながら、オレはそのままの格好で真理亜を待った。けれど真理亜は中で身支度もしているらしく、十分待っても出てこなかった。いいかげん手を下ろそうとした時にちょうどドアが開いた。

「ありがとう」

真理亜は言い、椅子に座った。

「食べようよ。私、お腹すいちゃった」

オレは耳に当て続けて痺れた手を揉みながらベッドの端に腰掛け、真理亜をじつと見た。

「いやよ、そんなに見ないで……」

これがタベオレが抱いた真理亜だと思つと、それでもオレはじつ

と見ずにはいられなかった。

*

気まずい食事を終えるとオレと真理亜はまた夕べと同じことを、意登子とやってたようなことを、でもまだぎこちないやり方で、やった。こんどは薄明かりをつけて。

十二時ちようどにはまた臭え犬の母親が昼食を運んできて朝食の皿を下げ、オレと真理亜は軽く笑いあいながら食事をとり、そして今度は少し入り組んだやり方でやることをやり、七時の夕食をとり、シャワーを浴び、またベッドに入った。

オレと真理亜はほとんど意味のあることは喋らなかった。

だって、意味とは全て過去につながってるから。

過去は全て外の世界につながってるから。

そして外の世界、つまりこの世はすべて、真理亜の傷につながってるから。

真理亜の手に触れるとき、その掌には真一文字に傷があつて、その傷はあの夜へとつながり、真理亜の父とつながり、母とつながり、臭え犬やその他の男たちへとつながっているのだったから。

オレと真理亜は今だけを語り合った。いや、さつきまでやっていたことの反省点を、そしてこれからの改善点を、抱き合いながら、口づけしながら、話し合い、それからきちんと、なんの妥協もなしに実践した。しなければならぬことは山のようにあった。

やがて躊躇と恥じらいにどうしても近寄れなかった唇が震えながら一瞬だけ触れ、けれどあまりの酸鼻さに涙目に潤んで許しを請うて離れ、それでも逡巡のすえ一時間後にはその柔らかな口ですべてを包むようになり、咽せたり咳き込んだり吐きそうになったりを繰り返しつつも、さらに一時間後には、拙いが心のこもった優しい舌の動きさえ感じとれるようになった。

歯が触れて一瞬引くと、

「痛かった？ ごめんなさい、今度はうまくやるから……」

そう言っただけで返るのだった。そしてそつと唇を当てながら、

「今度こそ、満足してね。靖くんのだつたら、飲んでもいいのよ」
このとき、オレはこの世が滅んでもいいとさえ思った。いや、この幸福の瞬間を永遠にするために、そうだ、オレと真理亜を引き裂くもの、真理亜の傷を消し去るために、オレは親父と一緒に、この世を滅ぼすべきではないかとさえ思った。

オレは真理亜の頭をそつと離し、そして抱き寄せながら、
「まだ終わりにたくない」

「ううん」と真理亜は拗ねた口調で言った。「……だつたら、いつ終わるの？ もう、私ばかりさんさん悦ばされて悔しいから、こんどは私があなただを悦ばしてあげたいの。さっきの私みたいに、あなたも泣いて涙を流して哀願してからでなきゃ、終わらせてあげないからね。覚悟するのよ……」

そう優しく言いながら真理亜はオレの左胸に頬を当てた。当てながら、

「心臓の音がする」

「人間だからね。それに生きてるから」

「生きてるうちは、私、靖くんと一緒に。どこにいても」

そう言つて真理亜はオレの乳首に舌を当て、唇を当て、柔らかく吸った。

*

オレは再び夢を見た。もちろん真理亜はたくさんいて、つながつていて、うごめいていて、しかもオレを無視しているのだった。

だつて、と真理亜は口々に言った。

ニセモノだもの。

オレはたまらず目を開けた。真理亜の顔があった。優しくキスされた。

「靖くん、なんか、うなされてたの」

「ゴメン、ものすごく怖い夢を見た」

「私がさつき、さんざんいじめたから？」

「そんなことはないよ、あるはずない」

「だったら、よかった」

真理亜は例の天国的な笑みを見せて笑い、オレの胸にサラサラの髪を振りかけた。

オレたちはまたするべきことをした。

*

一月もの間、オレらは部屋から一步も出ず、食事も洗濯も掃除も、そして真理亜の月のものの処理も全て臭え犬の母親にまかせ、ただ、ベッドの中ですべきことをした。もしかしたらここは天国かも知れないと思い始めた一月目の夜、真理亜は消えた。

そして一人分の朝食を持って臭え犬の母親が入ってきた。

「どこへ行ったんだよ」

オレは怒気を含めて言った。

「誰が？」

「真理亜だよ」

「あなた、何も聞いてないの？」

初めて臭え犬の母親が感情のこもった声を上げた。

「あれは真理亜ちゃんじゃないわよ。あれも促成培養のクローンじゃない。あなた、出荷前の不良チェックと初期設定をしてたんじゃなかったの？」

「何を言ってるんだ？」

「お父さんから何も聞いてないの？」

「クローンを使ってこの世を滅ぼすとか……」

「なんだ……あのね、クローニングが終わって出来上がっただけの段階だと、まだ本体のことを少し憶えてるから、一月の間、男と一緒に置いておいて、セックスのことだけしか考えられないように初期設定してしまうのよ」

「何言ってるんだ？ だって、手に傷があったぞ」

「だって、クローンって言ったって、促成でしょ、十七年かかるところを一週間で作っちゃうわけだから、完成率も低いし、完成度もバラバラだし、あんなふうに傷とか記憶とかも残っちゃうのよね。」

こう言っちゃなんだけど、あなたの所に来てたのは最高の出来だったわよ、これは保証する。お父さんに感謝しなさい」

親父？ もう親父なんかどうでもいい！

「真理亜は、さっきまでいた真理亜はどこ行っただよ！」

「騒がないで。大丈夫よ、今夜また新しいのが来るから。今度のもなかなかの出来よ」

「何言ってるんだよ！」

オレは本気で怒って言った。

「替わりなんかきくかよ、あの真理亜は本当に真理亜だったんだ！」

「またそんな馬鹿なことを。それにね、どうせ男は飽きるでしょ。」

どんな美人にも飽きるでしょ。だから、ね、黙ってしらんぷりしてここにやってくるクローンの処女を好きに仕込んでたらいいいじゃない。毎月、かわるがわる美少女の処女を自分の好きに仕込めるなんて、男の天国じゃないの？ それに今はまだ真理亜タイプだけけど、これからはアイドルなんかの色んなタイプも生産するから、男にとったら、ここはマサに天国じゃない」

オレはもう何も聞きなくなかった。ただ一人、あの真理亜を思っ
て泣いていたかった。オレはベッドに倒れ込み、枕に顔を押しつけ、泣いた。

「あなた、本当に、何も聞いてなかったのね？」

オレは枕に埋もれた首を振った。

「かわいそうに……」

オレは少し甘えた気分になってまた首を振った。

「だったら少しだけ教えてあげるわ。いい？ この上にある化成場ね、表向きは魚のアラとか家畜の内蔵とかの生ゴミを処分してるってことになってるんだけど、本当はゴミから取ったアミノ酸とかでさっきのクローンを促成培養してるのよ。設計図は真理亜ちゃんの体細胞なんだろうけど、身体とかは全部、もとはと言えば生ゴミよ」

「生ゴミ？」

「そうよ。上に行つてあの臭いを嗅いだら、百年の恋もさめるわよ」

狂ってる。

「お前らみんな、狂ってるよ！」

オレは起きあがり、臭え犬の母親に向かって絶叫した。

「狂ってるのは！」と臭え犬の母親もまた声を荒げ、そして思い直したように低い声で「……男じゃない。男がこの世を狂わしたのよ。女だけなら、この世はどれだけ平和だったか。どう？ 考えてみなさいよ」

この状況でいったい何を考えると？

「真理亜はどこ行ったんだよ」

「お人形じゃなくて？」

「夕べまでここにいた真理亜だよ！」

「そんなに会いたいの？」

「ああ」

「まあ無理ね。もう出荷しちゃったから」

「どこにだよ」

「さあ、出荷先までは知らないわ。きつとどこかの変態に買われたんでしょう。一年くらいセックス人形として動いていらればいいし、下手したら今夜にでも変態が切り刻んでしまうんでしょう。でもね、ここで愛をめいっぱい受けたお人形ほど、笑ったり、泣いたり、拗ねたり、叫んだり、許しを請うたり、命乞いしたり、反応が人間らしくて好評なのよ。きつと買った変態も満足してくれてるわ。こうやって、実際に変態の被害にあう女性が減っていけば、私も嬉しいのよ。あなたのおかげよ。あなたはいいい仕事をしたわ」

オレは怒りよりもむしる情けなさに涙を流した。夕べまでここにいた真理亜は、結局は意登子と同じ、親父からあてがわれたお人形だった。しかも今度は、オレは全身全霊を込めてそのお人形を愛していたのだった。あの愛はいつたいなんだったのか？

「まあ諦めるのね。実はね、みんな通る道なのよ。最初のお人形に恋着して、泣いて、アレしかないんだとか駄々こねて。でもね、次のがやってきたら、みんなケロツとしちゃうんだから。考えてみれ

ば結構なコトじゃない、飽きる前に次の処女がやってくるなんて……」

オレは立ち上がり、ポケットの中に用意しておいたあのバタフライナイフを取り出して一振りし、刃をセットした。

ヒイイーと呑むような叫び声をあげ、臭え犬の母親は尻餅をついた。頭を抱え、心底怯えた表情でオレを見上げていた。このナイフに憶えがあるんだろう。

「これ、憶えてるか？」

怯えきつた目が答えだった。

オレは切っ先をその目の前に突きつけた。

「目をエグってやるうか？」

返事はない。

「鼻を切り落としてやるうか？」

返事はない。

「鍵を出せよ。マスターキー、持ってんだろ」

臭え犬の母親は苦しげに、硬く、小さく、首を横に振った。

「ほう、切って欲しいのは耳か」

オレはなぜかひどく残酷な気持ちになっていて、理性の押さえが効きそうになかった。本気でこいつを切り刻みたくなった。そうだがあの真理亜がどこかで切り刻まれてるのなら、こいつを切り刻んだってなんの罪にもなるまい、だいたい、もう外の世界じゃ死んでる幽霊なんだ。

女を切り刻む！

オレはナイフを握りしめて性的な興奮を憶えた。

ナイフをゆっくりと臭え犬の母親の耳に近づけた。

オレの変化を察したのか、臭え犬の母親は頭に揚げた手をジワジワと下ろし、ゴソゴソと上着のポケットを漁り、紐のついたカナ釘のようなキーを差し出した。

鍵を受け取るとオレは鍵穴に差し込んでドアを開け、廊下に出た。ドアは電子のオートロックらしく、閉まると自動で鍵がかけられた。

内側からドアを叩く音と叫び声がかすかに聞こえた。防音はほぼ完璧らしかった。

さて、どうする。

廊下には同じようなドアが並んでいるだけだった。

オレはとりあえず向かいの部屋の鍵穴に鍵を差し込んだ。チツという音がしてドアは開いた。

廊下ではなく部屋だった。

入ると、ベッドの上では、ちょうど裸の真理亜が男の体に馬乗りになっているところだった。

オレの姿を見て、キヤと軽く叫んで真理亜はベッドに潜り込み、かわりに下になっていた男が起きあがった。

臭え犬！

こんな近くにいたのか……こいつも真理亜をあてがわれて……。

オレは何か不吉な予感がした。これまでこいつが出てきてロクなコトはなかった。

「根本くん？」

臭え犬は驚きもせず、落ち着いた調子で言い、裸のまま胡座をかいて真理亜をかばった。

「どうやって入ったの？」

「お前の母親から鍵を盗ったんだ」

「お母さんから……可哀想に、ひどいコトするね……」

「お前こそ、何してんだ、初期設定か？」

「うん、それに今日は休みだから……」

「休み？」

「そうだよ、ボク、今、『美術社』の社員なんだよ。ボクのシナリオとコンテって好評でね、会社も、もうエロとかグロとかはやめてキチンとした作品を作ってるんだ」

「たった一月で、たいした出世だな」

「ひとつつき？」と臭え犬は頓狂な声を上げ、「そうか……そうだよね」

「なんだよ」

「ビックリしないでね、もう二年経ったんだよ」

「二年！」

オレは不吉な予感に、その予感のもたらすものに恐怖した。

「あのさ、根本くん、鍵を持つてるんだったら、逃げた方がいいよ。きつと社長が探してると思うんだ。社長……憶えてる？」

「声の異様に甲高い奴か？」

「うん。でね、根本くん、逃げるときに黒本さんって人の首を絞めたでしょう？ あの人、死んだんだよ。あの人、社長の片腕でね……」

「あいつ、死んだのか……」

「恋人でもあったんだ。だから、見つかったら、串刺しにして……あ、串刺しはこないだよったから……こんどは皮剥ぎとかで殺されるよ、きつと」

「オレは人を殺したのか……」

不吉な予感はこちらだったのか……。首を絞めたときのあの嫌な感触が甦ってきて、オレは掌をズボンに擦りつけた。

「まあ、あの状況じゃ、仕方ないよ。社長は少し脅かす程度のことしか考えてなかったらしいんだけど、ボクらにしたらホントに怖かったからね」

オレはなぜか体中が身震いするような恐怖に襲われた。でもこれは穴を掘らされたときの恐怖とは違っていた。もっと、もっと、あんなのとは比べものにならないくらいの恐怖で、しかもその恐怖には激痛の記憶、大の字に縛られた身体と、オレの顔を覗き込む社長の顔と声の記憶さえ伴っていた。

……串刺しなんてのはな、ありゃショーなんだよ。拷問じゃない。あんなのすぐに内蔵出血で意識なんかなくなるからな。お前はな、指の先から関節をひとつづつ潰してやる。タオルを巻いて、ハンマーでな。絶対に出血はさせない。それで脚と腕の骨はすべて粉々にして、そのあと手足を縛ってぶら下げて小突き回してやる。まあそ

れでも点滴すりゃ一週間は生きるだろうな。一週間過ぎて、お前が泣きながら串刺しにして殺してくれて哀願したら、そしたら望み通り串刺しにして殺してやる。……さあ、やれ、足の先から、ゆっくりとな……

「根本くん？」

臭え犬の声に我に返った。

「鍵を持つてるんだったら、すぐに逃げた方がいいよ」

「どこに？」

「この見取り図があるから」

臭え犬はオレに「箱船部屋割り」と書かれた地図を渡してくれた。むちゃくちゃ細かな、それでも整然とした迷路の中に「根本居間」とか「真理亜」とかの名の書かれた部屋が孤島のように浮かんでいた。

「ここが、この、ボクの部屋。出口は四ヶ所あるよ。急いだ方がいいと思うんだ」

「この」とオレは「真理亜」と書かれた部屋を指さした。「真理亜は本物の真理亜か？」

「うん……そうだけど、会わない方がいいよ」

「なんで？」

「あいつ、社長の愛人なんだよ。社長は両刀使いでね……」

もう臭え犬と話すことはない。オレはドアへと向かった。

「ねえ、根本くん……」

呼びかけてくる臭え犬の声は異様に落ち着いていて、真心のようなものさえ感じられた。

「あの時、捨てて逃げて、ごめんね」

オレは、そうだ、こいつに捨てられて……麻酔が醒めて、縛られていて……触れてはいけない記憶の奔流を押しとどめ、

「気にしてないよ。元気だな」

「死なないでね」

臭え犬の声を背中にオレは部屋を出た。

廊下でドアの数を数えて現在位置を確認すると、オレはすぐに真理亜の部屋へ向かった。

廊下へのドアを開け、廊下を走り、またドアを開け……真理亜の部屋のドアの前に立ち、オレは躊躇した。

今度こそ本物だ。

だが社長の愛人だ。

いや、それは本意じゃないに決まっている。ここにやってきて、むりやり愛人させられてるんだ。そうだ、オレがここに来たのは真理亜を助け出すためじゃないか、そのために来たんだろう？ さあ、鍵をさせ、真理亜を助けるんだ！

右手が震えて鍵をさせない。

左手を添えた。

ドアは音もなく開いた。

三つくらいの部屋をプチ抜いたらしい、雑誌に出てくるような整った、けれどどこか毒々しく下品な部屋が広がっていた。

「真理亜！」

オレは叫んだ。

「なあにい？」

気の抜けた声が帰ってきた。オレはそちらへと走った。

「どうしたのぉ？」

トイレの個室らしい、けれどそれにしては大きなドアの中から声がした。

「オレだよ、根本だよ！」

個室のドアがボタンと開き、中には真理亜が腰掛けていた。

確かに真理亜だった。けれど容積が五倍位に増えていた。

華奢だった身体はまるでメスの象のように膨らんでいた。

細面だった頬も、エビス様のように垂れ下がっていた。

「一回座ると、なかなか立ち上がるのが億劫なのよね。どうしたのよ」

「よ」

「どうしたって……」

「たまに迷い込んでくるのよね。管理どうなっちゃってるのよ」「お前を助けに来たんだよ」

「あ、ちよつと待って、出そうなの、十日間出なかったから……」
そう言つと真理亜は両手を壁に突っ張り、顔を真っ赤にしていきんだ。

少しして大量の固形物が次々と水に投入される音が続き、真理亜の顔も次第に白く戻つてきた。

「ふう、便秘つてするものよね、この瞬間の爽快感がたまらないわ
そう言つて、小便もしているらしかった。

部屋のドアの開く音がして、

「おい、真理亜！」

社長の声だった。

「キヤア」と叫んで、真理亜はトイレの戸をボタンと閉め、「ノックぐらいしなさいよ」

社長はトイレの前にオレを見つけると、

「やっぱりここか。進歩がないな。何度繰り返さなきゃ気が済むんだよ、まったく。おい！」

男たちがドドツと走り込んできてオレの腕を両側から抱きかかえ、ポケットのナイフを取り上げると、関節をキメて後ろ手に手錠をかけた。

オレは呆然として何も出来なかった。

「大丈夫か、真理亜？」

社長は聞いた。

「大丈夫よ」とトイレの中から。「はやく連れてってよ。あ、そう
だ、今回はなんだった？」

「焼き鰻で指先から少しずつ焼こうかと思ってるがね」

「じゃ私も、今回は見ようかな、じゃ、あの部屋でね」(つづく)

第二章 欣求浄土 4 この世は美しい

二セの居間には、親父と意登子がソファに腰掛けていた。オレが連れられてくると、親父は立ち上がり、残念そうに微笑んだ。

「せっかく、俺と一緒にこの世を滅ぼそうって言ったのに。真理亜ちゃんを抱きながら、黙って待ってりゃ良かったのにな」

「いったい、何なんだよ！　これは！」

「見せてやるよ、来い！」

社長は三人の男に手で命令すると、オレはこいつらに引きずられ、意志とは関係なく歩むほかなかった。

隣の部屋だった。

社長はそのドアを開け、オレと男たちとを導き入れ、閉めた。

暗闇。

灯りがつけられた。

そして目の前のあまりの光景に、オレは息を呑み、そして叫ぶほかなかった。

叫び、叫び、叫んだ。

巨大な水族館のような水槽の中にはオレが、オレの身体が、しかも奇妙にねじくれつながって、まるで夢の中のように、隙間なく、浮かび、沈み、そしてその目が、オレの幾十もの目が、このオレを、ただ哀れみに満ちた光を浮かべて眺めているのだった。

「いつものことだが、胸がスツとするな、ここに連れてきたこいつの顔を見ると」

社長は言って、そこにあつたハンマーをオレの前に差し出した。

オレの骨を砕いたハンマー！

驚愕の中に、恐怖と激痛の記憶とがよみがえり、オレは目を閉じてうずくまろうとした。けれど男たちに支えられてできなかった。

社長はオレの顎を持ち上げて顔を近づけ、

「お前はな、毎月、オレに殺されるためにだけ作られる、特別のク

ローンなんだよ。ここにあるのは失敗作さ。あまり大きすぎて、培養液から出せないんだ。それでも生きてるんだよ、こいつもな。お前は上手く行った方だ、上手く行ったヤツはな、毎月毎月、生まれ来ては色んなやり方で殺されてるんだ。だがな、そこまでしてもお前が殺した黒本の無念はまだまだ、こんなもんじゃない。もっともっと残酷に、これから何十年も殺し続けてやる。そうだ、お前の前のヤツはな、尻からゆっくり三日かけて串刺しにしてやったよ。こういう技術も少しづつ進歩しているからな、今回の火あぶりも楽しめそうだよ。真理亜も今度は見るって言ってたな。どうだ、恋い焦がれた女の前で、なぶり殺しにされる気分は？」

ドアが開き、巨大化した真理亜が相撲取りのような足取りで入ってきて水槽を見上げながら、

「いつ見ても、これはすごいわよね」

「どうだ？ 元カレのこういう姿は？」

社長はオレと真理亜の顔を交互に見やりながら言った。

「嫌なこと言わないでよ、あれはただのカモフラージュだったんだから。カレがいた方が仕事やりやすいでしょ？ こいつ、成績だけはいいけど、騙すには調度いい馬鹿だったんだもん」

「オレのこと、好きじゃなかったのか？」

「こいつつたらね……」

真理亜はオレを無視して社長に話し続けた。

「自分だけは特別だっていつも言ってたのよ。自分以外はみんな愚民だって。馬鹿よね。自分だって愚民の一人のくせに。エリートのもりなのよね、自分だけが。ホントに鼻持ちならなくて、話しても、いつもゲーッって感じだった。大っ嫌い。だからこいつを蹴り殺しにするとこ、いつも楽しみにしてるんじゃない。まあ、最近は少し飽きてきたけどね、で、今日は何時から始めるの？」

「昼過ぎぐらいから、病院のプールでやるうか。おい！」

そう言っ社長はオレの肩を親しげに叩いた。

「今回は一週間くらい生かしておいてやる、感謝しろよ」

オレは出来ることなら男たちの手を振りきり、そこに土下座して命乞いしたかった。

ところが、オレの心を見透かしたように男たちの手が離れた。

オレは穴を掘らされたあの夜に臭え犬がしたように、床に跳ね飛んで土下座した。後ろ手に手錠をかけられたまま、額を床に擦りつけて泣きながら、

「助けてください、お願いですから……」

「どうだ、真理亜？ 元カレのこういう姿は」

「進歩しないわねえ。毎回これだもん。土下座する男って大嫌い。ねえ、あんた、いい加減、自分が人間じゃないって悟りなさいよ……」

……

「助けてよ真理亜あ……」

オレは真理亜に向かってても命乞いした。

「じゃ、始めるときは呼んでね。あ、今回は焼くんだった？」

「そうだ。指の先から焼き鏝でゆっくりとね」

「なんだ、じゃ、やっぱりやめとくわ。だって、こいつら焼くと生ゴミの臭いがするんだもん」

真理亜はオレに全くの無関心で出ていった。そうだ、無関心なんだ。ペットがトイレに紛れ込んできても、人間様はトイレを中断したりはしない。こいつらにとってオレは犬や猫、いや、真理亜にとつてはオレはただのノラ猫でしかないんだ。だからトイレでのあんな姿も見せたんだ。そう気がつくと、オレは絶望に薄笑いさえ浮かんできた。

真理亜と入れ替わりに親父が入ってきた。

「そろそろ最後の話をさせてよ、約束なんだから」

「そうだったな。今日はどこだ、リビングか？ キッチンか？」

「キッチンの方に頼むよ。それから、手錠はいらないだろ。ここまで知って逃げた靖は一人もいないから」

「でも、こいつはこれまでとは違うぞ、目つきや反応がまるで生きてるみたいだ」

「そりゃそうさ。技術も進歩してるからね。その靖はほとんど本物だよ」

「だから」と社長は親父に向かって嘲笑しつつ「お前、こいつを隠そうとしたんだな。ナイフまで与えて」

「……もういいじゃないか。お前にも子供が出来たらわかるよ。親の気持ちってものがね」

オレはリビングを抜けてキッチンまで引きずられ、手錠を外され、床に放り出された。

あのボタンの壁にはまた別のオフクロの肖像がかかっていた。

「じゃあ、三分だけ、二人でゆっくり話すんだな」

そう言って社長と男たちは出ていった。

「時間がない」

親父はしゃがみ込んでオレを招き寄せ、引きずるようにして立ち上がった。

「もうあの連中は同志でもなんでもない。お人形が好評で大金がガサガサ入ってくるようになったら、さっそく墮落しやがって。こんどは臓器販売だよ。いつたい何時になったらこの世への攻撃を始めるのか、あいつらのタイムテーブルはどうなってるんだ。だから臥薪嘗胆が必要なんだ……」

「親父……それより、なんでオレを作ったんだ！」

「なんでって……」

「オレは、ただ鬨り殺しにされるために生まれてきたのか？」

「そんな親がどこにいる！ お前には生きて欲しいさ、当たり前じゃないか。それに、お前は最初からガキじゃない。どんな生き方をしてどんな死に方をするか、それはすべてお前次第だろう。いいか、俺は、ここにいて俺にしてやれる最善のことをした。ただ、お前が俺の用意した環境を自分から振り捨てただけだろう。だけど、まあ、それはそれでいいさ。で、俺はまたお前に、親として出来ることをしてあげようとしてるんだ。いいか、お前はこれから、ここを出て外へ行け」

そう言って、社長たちが出ていったドアと反対のドアを開け、
「来るんだ。ドアは開けたままで、静かに」

そう言われてドアを出ると、廊下には真理亜と意登子が並んで立っていた。しかもその隣にはもう一人のオレが！

オレとオレとは互いに驚き合い、警戒し合い、目を合わせながら凍りついていた。

親父は向こうのオレをキッチンへと導き入れ、オレとの別れ際、
耳元に、

「お前は俺の希望だ。たくさんの人と会い、ふれあいながら、良く生きるんだ」

ドアの向こうから『時間だ！』という社長の甲高い声がかすかに漏れ聞こえ、激しく足音をさせて踏み込んでくる男たちの様子に何かを悟ったもう一人のオレが絶叫する声が出た。

そこにいた真理亜は、

「あなたは本物なの？」

「本物って？」

「夕べまで私と、暮らしてた……」

「オレが本物かどうか、実はオレにもわからないんだ。でも君にとつては、多分、オレは本物だと思う……」

「何を言ってるの？」

「オレにもよく……」

「どうでもいいけど」と意登子は二本の注射器を用意してオレたちに迫ってきた。

「二人とも、本当は外に行けるような身体じゃないんだから、ワクワクンだけは打つとくのよ」

そう言って、アツと言う間に、真理亜とオレの腕に一本づつ、服の上から、細いのに死ぬほど痛い注射を打った。

「これ、本当にワクワクンだろうな？ まさか、これ、細菌ってこと、無いよな」

「何言ってるの？ そんなことしたら、注射する私も危ないじゃない

い

意登子はケロリとした顔で言い、

「さあ、来て」

オレと真理亜は意登子について幾つものドアをくぐり、廊下を走り、やっと、遠くに外の光の見える空洞に出た。下は地面で、気をつけないとゴロゴロと転がる石に足を取られそうだった。

「出口の所に姫子さんがいるから、船を出して貰うのよ」

意登子と別れ、何度もつまづいて転びそうになるお互いをかばい合いながら、オレらは多分十数分をかけて出口にたどり着いた。何週間ぶりで浴びる陽の光は木漏れ日でも眩しいどころか目に痛かった。いやもしかしたら、オレはいま生まれて初めて陽の光を浴びているんじゃないだろうか。

いや！ 余計なこと、考えるんじゃない。

オレはオレであつて、オレ以外の何者でもないじゃないか。

なぜならオレはオレだから。

いったいオレ以外の誰がオレだって言うんだ。

いや、オレ以外の誰かがオレだとしても、このオレはオレじゃないか。

出口に立っていた臭え犬の母親は何も言わないまま、鬱蒼とした林の中、下へ続く道をオレの先に立って先導した。

オレも何も言わず、ただこいつについて歩いた。

森の細い道は小さな川の河口に通じていた。

臭え犬の母親は川岸から海の方へと突き出た船着き場に駆け上がり、海の方に向かって、

「ケンちゃん！」

すると河口の向こうの森の陰からモーターボートが現れた。

そして運転席には臭え犬！

またお前かよ……

「根本くん、何してるの、乗ってよ、早く」

オレは先にボートに飛び乗り、真理亜がオレの腕に飛び込んでく

るのを支えた。

臭え犬はオレらの方を振り返りながら、

「大丈夫？」

「ああ、それより、お前、運転大丈夫なのか？」

「うん、前来たときは無免許だったけど、いまはちゃんと免許も持ってるよ」

そう言っただけで臭え犬はボートを出し、母親に向かって、

「じゃあ」と軽く手を振った。

オレも、さつきナイフを突きつけた女に軽く会釈した。

*

オレら三人は海原へ出てかなりの時間、何も話さなかった。もう島も見えなかった。

オレは何か雰囲気のおかしさに気づいて、

「方向が違っくんじゃないか？ 島はこんなに遠かったか？」

臭え犬はいきなりボートを止めた。

「どうしたんだ？」

「そろそろ、この世が滅ぶよ」

「なに言ってるんだ……」

ボートの航跡が続く果て、島のあるあたりから、突然、巨大な水柱が立ち上った。

続いてボートがガクンと揺れ、地鳴りのような爆発音がやってきた。

「まさか……」

「根本くんのお父さんはね、主観的にこの世を滅ぼしたみたいだね。いや、自分を滅ぼしたのかな」

「まさか……、じゃあお前のお母さんは……」

「一緒だよ。根本くんのお父さんと一緒にこの世を主観的に滅ぼしたんだろ。でもね、最後にボクらだけは逃げろって言うてくれたんだ……私はもう死んだ人間だけど、アンタたちには未来があるってね。……お決まりの内部分裂だよ。根本くんのお父さんはこの世を

滅ぼすつてコトにこだわりましたね。社長とか他のみんなはお金がどんどん入ってくるから、もう世の中への恨みなんかなくなっちゃって、最初の考えにこだわってる根本くんのお父さんを疎ましがってんだ」

オレは何も言えず、目の前で起こっていることも、何もかも、自分自身さえ信じられず、ただ震える真理亜を抱きしめるしかなかった。

「波が来るからね、しっかり掴まってね」

見れば、臭え犬の目に涙が光っていた。

「オレたちは、これからどうなるんだ？」

「どうにかなるんじゃないかな」と臭え犬はサバサバとした口調で言った。「島の外じゃ、相変わらずこの世は続いているんだし」

「オレたち、どこに……」

「とりあえず、どこかの岸につけるよ。これまで使ってた港は爆発できつとムチャクチャになってるだろうから、どっかの岸に行くよ」

「臭え犬……いや、石川……」

「何？」

「オレは本物？」

「最後に残ったのが本物なんだと思うよ。根本くんもその真理亜ちゃんも、立派な本物だよ。それにもし本物じゃなかったとしても

……」

臭え犬はそう言いながらボートにエンジンをかけた。

照れ笑いしながら臭え犬は続きを言ったけれど、オレには「親友」という言葉しか聞こえなかった。

真理亜がオレの手に自分の手を重ねてきた。

そうだ、オレはオレなんだ。

なぜなら、オレはオレなんだから。

たとえオレ以外のオレが過去にいたとしても、いまのオレはオレ一人で、ここにいる真理亜はかけがえないオレの真理亜なんだ。

どんなことになってもこの真理亜を守って生きていこう、そう思

った。

愛しさと切なさに、真理亜を強く抱き寄せた。

「痛ッ」

真理亜は言い、オレから離れ、上着を半脱ぎになって意登子に注射された肌を出した。二の腕には注射された点を中心に、赤みがかった黒い円が広がっていた。

オレはゾツとして、シャツをまくり上げて自分の腕を見た。全く同じ黒い円があり、触れるとブヨツとして潰れそうで、もはや痛みさえなかった。

だからどうなんだ！

もう、どうしようもないじゃないか。

どうしようもない。この世に帰って行くほかない。

オレはオレだし、真理亜は真理亜なんだ。

全ての命は、生まれ、死ぬ。

それだけだ。

ふう、と、深呼吸をして覚悟を決めて見上げれば、見たことがないほど青い空だった。

その下には透明な青い海が白い波を浮かべて広がっていた。

美しかった。すべてが輝いていた。

「この世は美しい。この世は生きていくに値する」

オレは真理亜にそう言った。

聞こえなかったのか、何も言わない真理亜をオレはそっと抱きしめた。(了)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1790d/>

転生

2009年3月24日09時28分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。